

家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

1992 12



第91巻 第12号 日本幼稚園協会

# リトルツインズ

みどりの島、コロックル島は  
ふしぎがいっぱい。  
小さなりトルツインズ  
チフルとタフルのものがたり。



土田 勇・作

A4変型判 各28頁 定価各1,000円(税込)

原生林が果てしなく続く大自然の中に、青く澄んだ湖があります。その湖に浮かぶコロックル島の小さな住人たちトッテムさん一家と双子のチフルとタフルを中心に彼らを包みこむ自然を描いた、大きな愛の物語です。

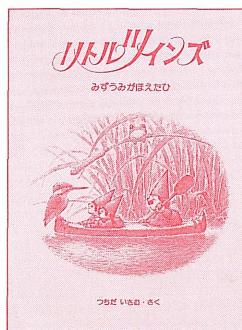
## ①コロックルじまはおおさわぎ

コロックル島は春真盛り。島のあちこちでは、新しい生命の誕生で大にぎわいです。リトルツインズ・チフルとタフルは、親ウサギに餌を運んだり、巣から落ちたヒナ鳥を巣にもどしてやったりの大活躍です。



## ②みずうみがほえたひ

コロックル島に夏がきました。トッテム父さんが、チフルとタフルを連れて、カヌーの川下りです。急流を下る父さんのこぎっぷりに感心しながら、ふたりは、はじめてコロックル島の浮かぶ広い湖を知るのでした。

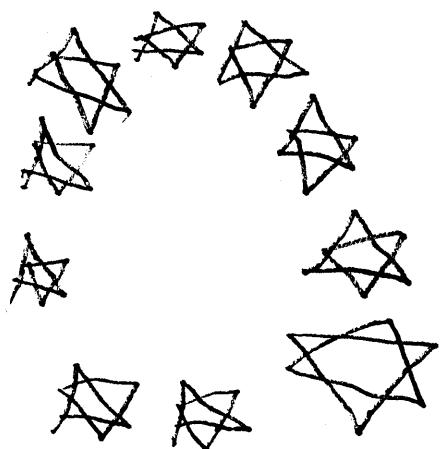


以下続刊

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの  
**フレーベル館**

# 幼児の教育



第91卷 第12号

# 幼児の教育

——第九十一卷 第十一号——

目 次

© 1992  
日本幼稚園協会

△卷頭言△温故知新

基底点に回帰する教育の指向……………高橋さやか…(4)

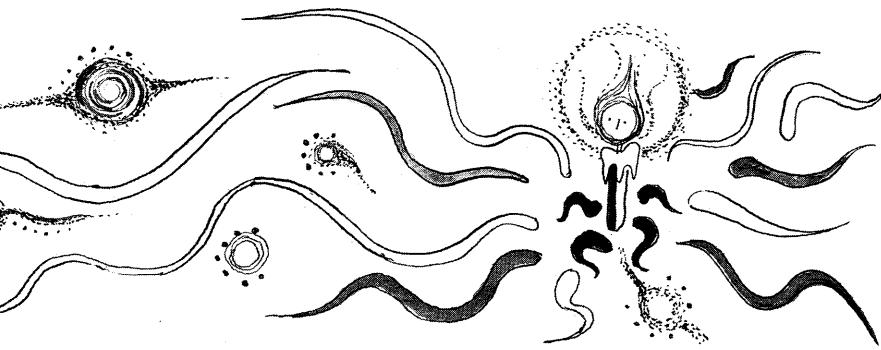
再会……………津守 真…(6)

こん袋……………美谷島いく子…(10)

子どもが自分で乗り越えるとき……………田中三保子…(17)

『ドリトル先生航海記』考

動物が活躍する子どもの文学の魅力を探る……………首藤美香子…(24)



保育環境としての施設・設備に関する一考察②……………永井理恵子… (32)

婦人宣教師、ミセス・プライアンの「おばあちゃんの手紙」(5)…小林 恵子… (41)

ある日の育児日記から(24)……………佐藤 和代… (50)

遊びのスクランブル交差点(6) 最終回……………仲 明子… (51)

けんかの少ない遊び おみせやさん(1)……………仲 明子… (51)

第九十一巻総目録……………(61)

表紙・平野 清

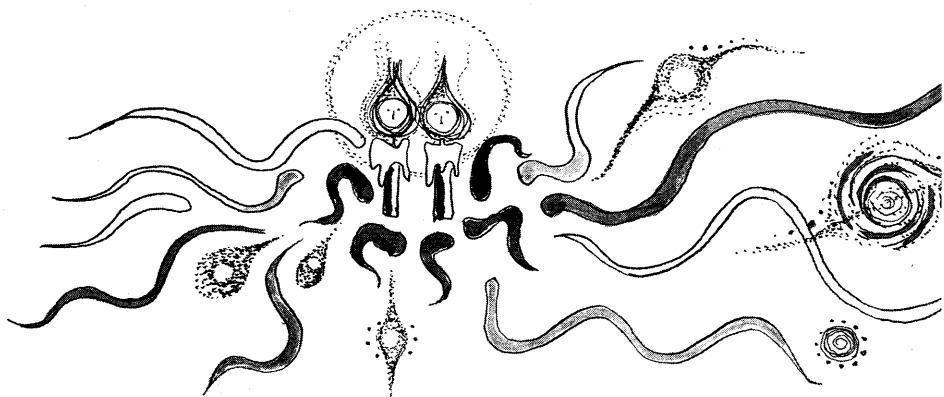
扉題字・堀合 文子

扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット・福田 理恵

編集委員・本田 和子／吉岡 晶子・岩上 節子

編集部・大沢 啓子



## 温故知新

### 基底点に回帰する教育の指向

高橋さやか

激動・動乱の一九九〇～一九九一年。そして一九九二年も早くも極月。この一年、何がどう治まったのか、更なる動乱がはじまっているのか。半世紀も

子どもの教育専一にかかりつけた者にとって、決然とする——することができる事理一つ見当たらぬまま、時が移り過ぎるのを否応なく思い知らされるのは、何とも身の置き場がない、口惜しくもおちこまざるを得ない心地である。

いずれあと幾年も生きないのであれば諦めて見切りをつけるのが年相応と言われそうだけれど、如何にも年相応に、どうしても、見定めた身のおきどころが、「温故知新」——幼児の教育（早期児童教育）は、その基底点

に回帰すべきであり、それを指向して歩むことがまともな前進・発展へのあり方だ、という覚悟になつた。

この国でも、草創期の幼稚園は、30名前後で一応の規模を成立させ、60名前後を一園の定員の目途としていた。三歳～六歳の三年保育で各年級12～24名（多少の出入りを許容して、一クラス20名平均で三クラス）の60名が幼稚園というものあるべき様と考えられていた。今日でも、欧米の常識的かつ最もな幼稚園は50～60名定員を越えないものようである。

人間は、誕生して生命体として独立し、ほぼ一歳六ヶ月で人類の特徴を確保確立し、三歳で自我を確

立し、六歳で基本的人格（人間——社会人としての規格＝社会生活者として独立し共同し得る基本的可能性能）を獲得する……ならば、保育幼児教育の目標の基底には他に目の外<sup>そぞ</sup>らしよりもなく「基本的人格の達成」があり、教育集団の形態に見る基底には小規模（少數定員制）園が断乎存在する。

心理学の力学説にいうところも、集団成員間に機能する心理的交流の力関係は、30名以内において相互にほぼ同等に及び合う、とされていて、それ以上の集合体では、次第にひびき合う人間関係は拡散し、稀薄になり、おとなでも、まして子どもは、個に還元あるいは内閉してしまう。「わたし」と「わたしたち」が一致し共同できる「集団」の構成人員は30名を一単位（の限度）として見ることができるのである。小グループとしては6名がよくまとまりかつ活性度が大きい規模といえるようであり、クラス集団として、12～24名（ $6 \times 2 \sim 6 \times 4$ ）、教育

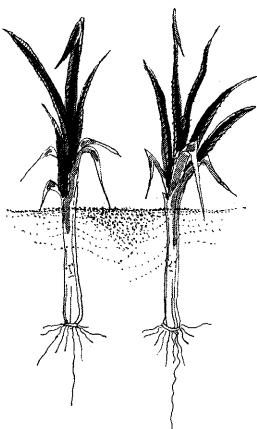
集団としての一園が50～60名、というさきにあげた数字は、いい加減ではない、理論的に意味のある数字である。

理論的といえば、保育教育理論でも、故<sup>ふる</sup>きを温（たず）ねることにいま一度熱意を傾注しなければならないと切に思う。

ルソー、ペスタロッチ、フレーベル、デューア、倉橋惣三、クルーピスカヤ、……もう古い、というのは、ただ名前と生年について知っているだけで、これら先人の所説立論をどれほど知つて……理解した上で、なのか。よく学んでもないのに、古い時代は激しく猛烈な速さで変わつてしまつているのだ、とばかり顧みず、心も虚にただ先を急いでいるつもりでも、それでは荒廃したこの世紀末世代から、もう一度「人間」の生活と、「生活者人間」の教育の、本当の新しい出発・再建を期すことはできないと考える。

# 再会

津守 真



この夏、米国アリゾナで行われたOMEП世界大会に参加して後、帰途、以前私共の養護学校にいた子どもの家族をサンフランシスコに訪ねた。丁度十年前に私が養護学校の子どもたちと毎日生活するようになった最初の日、その子は両親と一緒に二人の弟たちと一緒に、はじめて私共のところに来た。弟たちはすぐに活発に遊びはじめたが、この子は砂場のわきに立つたまま動かなかつた。私はこの子が安心して

動けるようになると、少しずつ近づいて砂場の中に座つた。そんなところからこの子は私に親しみを寄せるようになつた。私も、自分の生活が新たになつた最初日のことでもあり、とくに注意深く考えて接したと思う。その日のことについては、『子どもの世界をどうみるか』(日本放送出版協会 P. 123—126、P. 145—150)に記した。そんなことから始まって、この子は私に対していくいろいろの課題を投げかけてき

た。ある時期には、食物を半分食べて残りの半分を床に投げ捨てることがつづいた。私はどうしたらよいか悩んだが、あるとき、これはこの子が何かを私に訴えているのだろうと気付いた。大好きなお菓子も半分食べて、あと半分をだめにしてしまうというのは、自分が始めたことを最後までやり遂げられないでいる体験を行動によって表現しているのではないかと考えた。そう考えたとき、何事であれ、この子が自分で納得して終結させるまで、この子の活動を守つてあげようと思い、実際そのように努めた。そのときから、食物を投げ捨てる行動は劇的に減少した。それまで私は、幼児が自分から始めたことを大切にすることが保育の実践の出発であることを知っていたが、この子どもとの交わりから、子どもが納得して終わることは、同様に大切なことを学んだ。

この子は約三年間、私共の養護学校の幼稚部で過ごして後、父親の仕事の都合で米国に移住した。母

親からは手作りのチョコレートを送つて頂いたり、クリスマスカードを送つて下さつて、この子が私の名前をときどき口にしていることを知らされたいた。米国では、この子は養護学校小学部にいった。そこで行動療法の理論によつて、この子が手を髪にあてる癖をなおすプログラムが組まれたとき、両親は学校にゆき、そのような癖を親は気にしないこと、子どもが生活を楽しめるようにしたいと願つてることを先生に伝え、先生も親の希望をいれてすぐカリキュラムを組みかえたことを聞いた。私はこの両親の見識に感心した。数年前には、その学校の先生が、日本に観光旅行に来られたとき、わざわざ一日を割いて、私共の養護学校を訪ねて下さつた。穏やかで控え目な米国の婦人で、これらのことを見こまかく話された。私もこの子の生活を具体的に語り、周囲が騒がしいときにはトイレの隅に入つて黒い絵の具を紙一面に塗つてはトイレに流していたこと、先生達の机のひき出しから写真を取り出して

眺めるのが好きだったことなどを話すと、目の前に見えるようだと言つて、楽しく別れた。

今回は丁度七年ぶりに、私自身がこの子を訪ねることになった。幼児のときに、この子と悩みつつも楽しんで過ごした、あのときのことは大切な記憶として抱きながら、年月を経たいまは別のつき合いなのだから、新しい出会いをしようと心に決めて出かけた。

熱い砂漠のアリゾナの岩山は、飛行機で上空から見ると、フェニックスからサンフランシスコの町のすぐ手前までつづいているように思えたが、空港をおりると別世界の涼しさであった。ホテルに着いて翌朝、父親が車で迎えに来られた。子どもは私に会うというので今朝からいつもと様子が違うとのことであった。車の中でこの子は私の脇でうずくまり、次第に足を私の肩にのせて、ときどきちらりと私を見た。ようやく足の先で私に触れることによって挨拶をしているようで、正面から顔を合わせることなど恥ずかしくてできないというような具合だった。

それだけにこの子の中にも再会の心の高揚を感じさせられた。三十分程車で郊外に出たところにあるその家は、米国西海岸に特有の平家建ての家で、広い庭に向かってテラスがあった。中学一年生になつたこの子は、まだ私よりも背丈は低いが、幼児のときは違つた体つきになつていた。以前よりもずっと社交的に明るくなつた父親が、「つもりジユース」を御馳走しましようと、パック容器のジュースを台所から居間にもつてこられた。私は何のことかといふかっていると、ポール・ニューマンの顔のプリントされたその容器のジュースを、子どもはこう呼んでいるとのことだった。私は、あのときのことを、この子がそんな風に記憶していることを知つて、全身が颤えるような気がした。そして、不安定な時期を支えた人に対する記憶は、いつまでも子どもの心の内に留まっていることを知らされた。毎日の生活

の中で、行動を子どもの心の表現として見て保育するのには、ある種の冒險を必要とするのだが、あの時そうしてよかつたと、あらためて思った。

庭で、母親の手作りのメキシコ風の昼食バー ティーの間も、この子は飛びはねたり、室内の片隅にいつたりしていたが、私共の方をちらちらと見ていることに私は気付いていた。母親が台所に立つとついてゆき、ボールの中のヨーグルトをスプーンでかきませて冷蔵庫にいれるのも、幼児のときからの

である。

父親はあと十年はここで腰を据えて専門の仕事をするつもりだと顔を輝やかせておられた。弟たちの頃には、私の膝に座り、私を見上げて、幼児のときと同じ笑顔を見せた。空港に出発する時間が近づき、私共はそれで別れねばならなかつた。

子どものある時期の日々を、一生懸命に支えつつ子どもと共に生活した記憶は私共の中につまでも生きているし、子ども自身にとつてもそれは忘れ難

いだらうと思う。しかしそのことを互いに確認する機会は稀である。今回の再会はその意味で私にとり貴重なものだった。再会は、互いがその後の人生の歩みを一步進めた時点のことである。過去の記憶には懐かしさが伴うが、それだけではない。あのときには、互いに生きる力を得た。その同じ力をもってこれからはそれぞれの道を歩むのが、再会の更に後である。

# こん袋

美谷島いく子

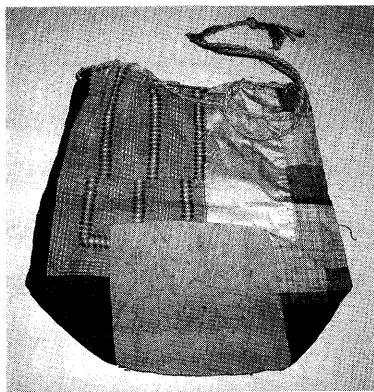
「こん袋」との出会い

私は、小さな端切れを、何枚も丹念に綴り合わせた、ひとつ小さな袋「こん袋」に出会った。

それは、側面に、黒三枚、赤四枚、鵝色とクリーム色一枚、灰色とベージュの格子一枚の計九枚と、ショツキ



▲写真1 「こん袋」 黒と赤の対比に目を奪われる。



▲ 写真2 「こん袋」

ショッキングピンクの底が  
付けられている。

ングピンク一枚の底から成る、それぞれ大きさの違う端切れが、黒の木綿糸で、一針一針ていねいに縫い合わされた袋である。側面の鵝色とクリーム色の一枚のみが、少し光沢のある化織の他は、木綿。袋の口には、紐が通るよう、麻紐が千鳥掛けで付けられ、そのループに、「わざわした」麻紐が通されている。

裏面は、梶色の布が使われ、小さな破れ穴は、同じ布で、ていねいに縫われている。



▲ 写真3 「こん袋」

裏の小さな破れも、ていねいに  
縫われている。

木曾の黒川渓谷一帯では、陰曆の十一月二十二日（今  
その大きさは、長さ32cm、幅27・5cm～29cm（底の方  
にゆくにつれて広くなる）、底の長さ15cm、底の幅15・  
5cm、口紐の長さ、つばめると65cm、口を拡げると45cm  
である。

の十二月二十三日) の夕方、イギリスやアメリカの子ども達が、クリスマスに、暖炉の前やベッドの足元に、靴下をつるすように、子ども達が、この「こん袋」を、家の入口に、願いを込めてつる。

すると、霜月下弦のこの夜、雪の中を、大師様が訪れ、「こん袋」の中に、子どもの喜ぶ贈り物を入れて去つてゆくという。

私は、この「こん袋」を見た時、黒と赤、黒とショッキングピンクという色合わせの強烈さに目を奪われた。よく見ると、黒は、黒と灰色の縦縞が二種類、赤は、黒い水玉と白の模様があるし、ショッキングピンクには、白い縦縞が入っているというふうで、一枚一枚は、地味な布である。それが、大切に綴り合わされることによつて、新しい生命を与えられたかのように、強烈に、私に迫ってきた。

机上に、平らに置いてみても、あちこちに、でこぼこ皺が寄り、一針一針の間に、昔々の炉端の会話と、これ

を作った人の温もりが閉じ込められているような、この単純素朴な「こん袋」から、私は、この袋を作った、黒川の女達の、大師様を迎える、子どものような弾む心、喜びの心を聞き取つたのである。

「こん袋」と出会つてから私は、この「こん袋」は、誰によつて、どんなふうに作られたのだろうか。大師講の夜、「こん袋」は、どんなふうに、子どもによつてつるされたんだろうか。「こん袋」の中に入れられた、子どもの喜ぶ贈り物とは、具体的には何だったんだろうかと、様々に、「こん袋」をめぐつて、思いを巡らせていた。

この一枚の「こん袋」が収集されている、松本城わきの日本民俗資料館にも調べに行つた。しかし「民間信仰資料コレクション」として、昭和三十四年五月六日に、国の重要民俗資料に指定される以前から、資料館にあつたもので、西筑摩郡新開村(現、木曽郡木曾福島町)で用いられていたという以外、記録カードは白紙のままで、具体的な詳しいことは、何もわからなかつた。

それ以来、私は、この「こん袋」が作られ、霜月下弦の雪の夜に、大師様の訪れを待ち望む子どもによつて、つるされた、黒川渓谷という土地を、一度は、訪ねてみたいという思いにかられていた。

娘の夏休みが終わった八月十八日、私は、やつと黒川渓谷を訪ねることができた。

いう。無線で、問い合わせてくれるが、誰も知る人はなく、「うんと年を取つた人のいる家へ行かなければ」と言つて、案内してくれたのが、車で十分位の、古幡さんの家であった。

古幡さんの家は、「渡合」というバス停の近くにあり、二百五十年前に建てたという、大きな栗材の本棟造

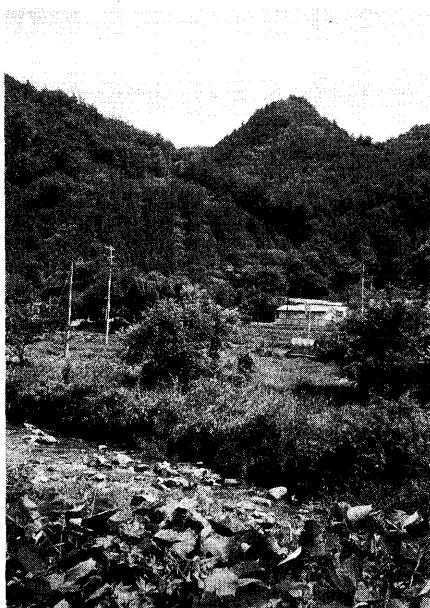
写真4 木曽福島町黒川。黒川と山々が迫る

古幡さんの家付近。

### 「黒川渓谷を訪ねて」

松本では、やつと咲いた百日紅の桃色の花が、小雨に濡れていたが、一時間、列車に乗り、木曽福島駅で下車すると、日が差し始めていた。

タクシーは、豊かな水をたたえた黒川渡ダムを過ぎると、飛驒高山へと通ずる山間の道を、黒川の清流に沿つて登つてゆく。「こん袋」のことを調べに黒川村へ行きたい旨、告げる。中年のタクシーの運転手さんも、この奥の村の出身と言うが、「こん袋」のことは知らないと



りの家で、今は、民宿をやつておられる。

古幡さんは、奥の囲炉裏端へ、私を案内し、「こん袋」を楽しみにしていた。子どもの頃の生活について、語つてくれた。天窓から差し込む陽光が、煤けた梁や帯戸、自在鍵にかかつた鉄びんに注ぐ。

山間の村だから、耕地が少なく、米は食べる丈。冬期の炭焼きの山仕事の他は、この母家で蚕や木曽馬を飼つて、現金を得る生活であった。

小柄で、おとなしい木曽馬は、農耕、運搬に重宝されるので、母屋で大切に飼われており、木曾福島で、七月と九月に開かれる馬市で、岐阜、愛知の農家へ博労を通して売られていった。

「こん袋」は、「日常や祝儀、不祝儀等に、米、米粉、大豆、小豆などを入れて義理をすませたりする贈答用の入れ物」（『木曽—歴史と民俗を訪ねて』）木曽教育会刊）である。

「明日は、大師講だよ」と、両親や祖父母に教えてもらうと、夕方、子ども達は、引き出しから、各々の「こ

### 「大師様——霜月下弦の夜の客神」

子どもは、親に頼まれて、親類の家やお寺などに、新盆や新御魂の折に、「こん袋」を持ってお使いをしたといふ。

この「こん袋」を、大師講の夕方丈は、子ども達は自身への贈り物を入れてもらう為に、つるすのである。

古幡さんの所では、年寄りが、着物の端切れを、何枚もはぎ合させて、「こん袋」を縫いあげ、居間の簾笥の引出しに、何枚か入れてあつた。木綿のものの他に、家で養蚕をし、機を織つた絹の布地を綴り合わせた美しい「こん袋」もあり、それには、繭からとつた真綿を、三編みにした生成りの紐が通されていたという。しかし、

残念なことに、古幡さんの家には、「こん袋」は、今は、ひとつも残っていない。

「こん袋」を取り出して、家の入口の、松飾りをする柱の所につるした。又、中谷部落では、厩の馬をつなぐませ棒に、芝原部落では、土間のわらたたき石の上に、子ども

達が、願いを込めて、「こん袋」をつるした。子どもが、三人いる家では、三つの「こん袋」が、五人のいる家

所に「こん袋」をつるした。

では、五つの「こん袋」が、玄関先や、土間や、厩にかけられた。

陰曆のこの日は、一年中で、最も昼の短い冬至にあたり、月は、満月が半分になる下弦の月で、二十三夜にある。一年中で、最も太陽の力が衰えるこの日、家の門口で、茄子の枯れた茎で火をたいて、太陽の復活を祈る習慣があつたというが、それが、いつか、弘法大師や聖徳太子を祭る、大師講（太子講）に変わったという。黒川では、「大師様は、神通力があつて人を助けてくれる」と言っていた。

太陽の力がだんだん衰えて、周りの世界が色を失つてゆく中で、客神大師様を待ちわびて、一年中で一番長い夜、子ども達によつてつるされる「こん袋」。黒川の老婆達は、「こん袋」の中にこそ、太陽の蘇りと、新しい年の豊穣を夢みて、黒と対極にある、赤やショッキングピンクという色合せを楽しんだのではないだろうか。



▲写真5 古幡さんの家の入口。この紐の所に「こん袋」をつるした。

黒川渓谷の黒川、橋詰、芝原、中谷という村々を訪れ、「こん袋」の中に、子どもの喜ぶ贈り物を入れて、そつと去つて行つた。

大師様からの贈り物は、一針一針に、新年の豊穣を祈つて刺された、「こん袋」の温もりに、そつと包まれて、子ども達の手に届くのを待つ。

その夜、黒川では、訪れてくる客神、大師様に供える為に、小豆のおはぎを作り、仏壇に供え、新しい年の豊穣や幸福を祈つて、皆で食べたという。

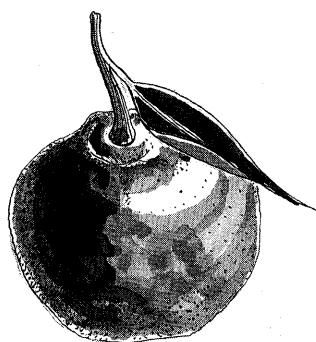
この夜は、不思議なことに、必ず雪が降るという。雪がちらちら降り始めるど、人々は、「大師様だで、雪が降る」「大師様がこちらに回つて來た」と言つた。その雪の由来は、『跡隠しの雪』という伝説として伝わつてゐる。

翌朝、子ども達は、早起きして、楽しみにしていた「こん袋」をあける。子どもの賑やかな歓声とともに、復活した新しい太陽が登る。春の訪れの第一歩である。「こん袋」の中には、キャラメル、飴などの御菓子、ミ

カン、ノート、鉛筆、消ゴムなどの学用品や、『小学一年生』などの雑誌が入つていた。古幡さんの話では、買った物が多かつたという。今のように物が豊かになかつた当時のこと。子どもの喜びは、どんなであつたらうか。子ども達は、新しく降り積もつた雪で、大師様の足跡は見ることができなかつた。

これは、今から五十数年前の昭和十数年前後まで行われていたことである。

(松本市在住 舞々同人)



# 子どもが自分で乗り越えるとき

田中三保子

子どもたちは、それまでの生活の中から、すでに、価

値観や生き方を小さいなりに身につけて入園していく。

幼稚園という新しい集団に入り、異なる価値観や生き方には出会って、それを自然に受け入れる子どももいれば、両方の価値観の間で揺れ動く子どももいる。

子どもは、この揺れを自覚しているわけではないが、遊びの中で、何とか解消しようと試みているのではないか。そのことを改めて教えてくれる「せんせー」と、私は出会った。

## ○閉じこめられる

年長組の十二月初めのこと、保育室では男児が三人、羽子板に焼絵をしていた。初めての経験で危なっかしかつたり、うまくいかなかつたりで、私は傍で様子を見ていた。

「せんせー、大きいへやに来て」とE子が私を呼びに来た。「いいから来てよ。早く、早く」とせきたてる。しばらく焼絵の様子をみてから、私は走っていくE子の後を追った。

遊戯室に行ってみると、ワッフルブロックで細長い囲

いのようなものができている。

「おうちなの。R子ちゃんと作ったんだよ」

「ずい分大きいのができたのね。お玄関はどこかしら」「ここだよ」

E子は言いながら、ブロックの一部をはずして示した。

「はいって」

E子は言ひながら、ブロックの一部をはずして示した。

「はいってもいいの」

「いいから、はいって」

「おじやまします」

「おじやまします」

傍でR子がにこにこと見ている。狭い入口からもぐりこむようにして、私は中に入つて座つた。すると、E子はずしたブロックを再びくつつけ、「はいった、はいつた」とはやしたてるように言つた。いつものように、何

かもてなしを受けるものと漠然と考えていた私は、びっくりした。一瞬、何か起こったのかつかめなかつた。E子はブロックのすき間から私を眺め、どこかへ行つてしまつた。R子の心配そうな顔がブロックのすぐ向こうに見える。どうやら、私は閉じこめられてしまったようであれば、また別の展開があつたかも知れない。

ある。

焼絵の様子も見に行きたいたが、E子は戻つてこない。

私はちょっとむつとした気持ちになつて、E子を待たずに出ることにした。せつかく作つたものだから壊さずに出るにはと考えて立ちあがると、扉いは案外低く、乗り越えたら簡単に出られた。R子がほつとした表情になると、保育室へ戻ろうとすると、背後からE子の声がした。

「なんだ、もう出ちゃつたの」

私はちょっと申し訳ないような気持ちになつた。

「そう、出られちゃつたの」

「なーんだ」

もう一度、E子はがつかりしたように言つた。

保育室に急ぎながら、私はひどく後悔していた。理由はよくわからないけれど、E子は私を閉じこめたかったのである。私は抗つてしまつた。E子の気持ちに沿うことがどうしてできなかつたのだろうか。E子に応じて

○ E子と母親、そして私

E子は三歳からの入園児である。入園当初は母親から離れたがらなかつた。好奇心が強いので、周囲の様子に気持ちが向いて、母親の存在を忘れたようになることがある。その間に母親はさつと帰つてしまふ。母親がいないうことに気づくと、E子は火がついたように泣き、抱き

安というより、自分の気持ちを受けとめてもらえない母親への、苛立ちの表現のように見える。知らないおとな  
の慰めなど、受けつけられる状態ではないのであるう。  
かといって、そのままにしてはおけないので、いやがる  
のを抱き取り、興味のもてそうなものを探して歩く。泣  
いて抵抗していたのがだんだん落ち着き、自分から降り  
て遊び出すまで、私は毎日つき合った。

とめようとする手を「ママがいい」と払いのける。日を重ねるうち、置いていかれることを恐れて母親にしがみつくようになつた。それでもやはり、面白そうなことに注意が向いて、一人残されることになる。E子が新しい環境に慣れるまで傍にいてあげてほしいと母親に頼んで

登園しても泣かなくなつたE子は、砂場で遊ぶことを好んだ。茶碗に砂を詰めたものをいくつも作る。そして、いつも私に向かつて言う。「先生なんかにあげないよ。」私なんかに簡単に心を許したりはしないと言つて、いるような気がした。

環境に慣れるまで傍にいてあげてほしいと母親に頼んでみたが、小学生の姉を送つていかねばならないからと、応じてもらえなかつた。母親は、E子の気持ちを思いやることより、事を順調に運ぶことを願つているようじられた。

E子は泣きながら母親の姿を求め、廊下や玄関までも出ていく。姿のないことがわかると、地団駄を踏む。不出でいく。

帰りの片づけの最中に「作つて」と言われたことに対  
して、きょうは無理だから明日作ると返答した後のこと

である。明日必ず作つてあげようと本氣で思つて言つたのであつて、無視するつもりなど全くなかった。まだ三歳の、こんな小さな子どもが、無視されることの痛みを知つてはいる、そしてその怒りを私にぶつけてきたことに少なからず衝撃を受けた。

二学期の最初の日、E子は砂場で、「先生に作つてあげるからね」と私に「ちそうを作つてくれた。その後も、度々、E子は「先生だけにあげるんだから」と「ちそうを作つてくれたが、「先生なんかにあげないよ」と言い出すことも、またあつた。私に親しみを感じる一方で、拒否したくなることもある、E子の心が揺れ動いているのを私は感じた。

年長組になつても、E子は親しみと拒否の両方の気持ちを私に示した。私を全面的に信頼しきれないでいる。

E子は、幼稚園では好きなことを次々にやつてきた。友だちや、時にはおとなにさえ強い調子で物を言い、自分が意志を通そうとしてきた。

砂や土と水を混ぜてドロドロの「ちそうを作る。虫を

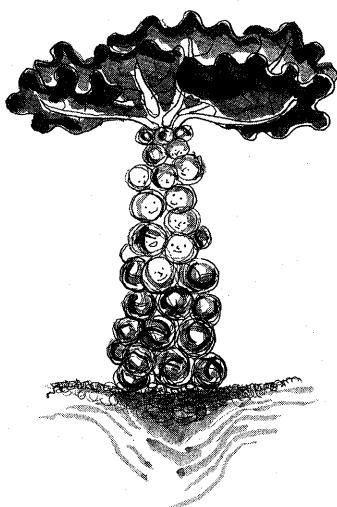
追いかけてつかまえる。E子にとつては楽しい体験なのだが、母親には理解してもらえないらしい。

「ママが汚しちゃいけないって言つたの。どうしよ

う」

「着換えれば大丈夫よ」

「きょうはおかげがあるから、この服にしたの。だか



らママが汚しちゃいけないって

「この虫、持つて帰りたい」

「いいわよ、どうぞ」

「でも、うちに虫かこないの」

「買つていただぐか、代わりのものをお母さまと考えて

みたら」

「だって、ママが、うちでは飼っちゃいけないって言つ

たの」

E子は、母親の知らない世界で、新しい価値観に目を開かされてしまった。母親はそれに理解を示さず、強い力でE子の前に立ち塞がる。E子の私への不信感は、母親への不信感なのかも知れない。

四歳の十月、E子は角が二本ある鬼の顔をピンク色で描き、私のところに持ってきた。

「ママの顔なの。先生にあげる。」言うなり外へとび出

してしまった。

五歳の十二月半ば、お弁当の時に私はE子の隣に座つた。

「先生はお弁当いつ作るの。夜作るの、朝作るの」「そうねえ、夜作ることもあるけど、大ていは朝作るわ」

「うちのママはね、夜作るの。それで、外にほっぽつておくんだよ」

私は「ほっぽつておく」ということばに強い衝撃を受け、E子はどんな気持ちでそう言つたのだろうかと思つた。この時期、幼稚園ではお弁当を暖める。朝冷たくても、食べる頃には程よく暖まる。事情によつては、前晩にお弁当を作ることもあるであろう。傷まないようになると外に出しておくことが必要な場合もあるかも知れない。それでも、「ほっぽつておく」とE子が表現しないですむような配慮を母親がしてくれることを、願わざにはいられなかつた。

### ○再び閉じこめられる

二月の半ば、私は廊下のレストランに招かれていた。特製カレーを注文していると、E子が遊戯室から走つて

來た。「せんせー、来て。」

四日前から毎日、E子はM子と二人で、遊戯室に家を作っていた。舞台の左端と、脇の長椅子の間（幅數十七チ程）に板を渡し、上が居間、下が寝室である。上の居間は、日によってお祭りの舞台になつたり、レストランになつたりして、私は毎日客として招かれていた。廊下のレストランのN子がカレーに添えるコップを作ると言うので、私はその間にE子の家に出かけることにした。

きのうまでと同じところに、家はできていた。板の上には何もないのに、きょうはどうなるのかなと思ひながら、E子についていく。M子と、一緒にいた女兒三人がみんな、私を見た。「ここにはいって」とE子は板の下を指した。私は、E子が再び私を閉じこめようとしていることを直観した。そして、きょうはE子の意に従おうと覺悟を決めた。

言われた通り、私は狭い空間に仰向けて身体を滑りこませた。頭の一部が出てしまった。「ちょっと待つて

て」と言うと、E子は走つていった。上を塞ぐつもりらしく積木が一つ用意してあつたのだが、それでは間に合わなくなつて、いろいろ探しにいったらしい。この前のように私に出られたら大変と思うのが、あわてて塞ごうとしている様子が感じられる。

私の頭が全部隠れると、中は真っ暗になつた。E子の「やつた、やつた」という声が聞こえてくる。今後は、完全に閉じこめられてしまった。M子や他の女兒はどうしているのか、静かで会話一つ聞こえてこない。床を通して寒さが身体に伝わつてくる。

程なく頭上でE子の声がして、明るくなつた。「大丈夫、今出してあげるからね。」E子はせつせと積木などを動かして、上半身を出してくれた。私はゆっくりと身体をおこして外に出た。

E子は、私があまりにも素直に閉じこめられてしまつて、少し戸惑つたようにみえた。閉じこめてはみたものの、中の様子は見えないし何も聞こえてこないので、心配になつて、すぐに出してくれたようである。のぞきい

んで「大丈夫」と聞いてくれた声には、優しさがこもっていた。

### ○関係の逆転

私はE子に対し、母親とは異なる価値の体现者でありたいと願い、努力してきたつもりであった。E子も母親と区別して受けとめてくれているものと、疑いもなく思っていた。しかし、E子にとってはそんなに単純に割り切れるものではなかったようだ。権力を押しつける者という点では、親も保育者も似たような存在と映っていたのであろう。

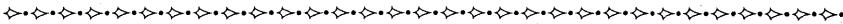
E子は、私との間の、こうした権力関係を乗り越えたかったのではないだろうか。私を封じ込め、支配することができれば、一時的にせよ、権力関係を逆転させることができ。そうして初めて、E子は私を対等な存在として認めることができたのではないか。

再び閉じこめられてから一週間程して、私はE子が素

直に「はい」と言うのを、初めて聞いた。今までは、何か頼むとニッコリ笑うだけのことが多く、結果を確かめるまでは、それが否か応かほとんどわからなかつたし、「はい」という返事には「やればいいんでしょ」というニュアンスがこもつていた。

幼稚園での最後のお弁当の日、私は再びE子に聞かれた。「先生はお弁当いつ作るの。」この前と同じやりとりが繰り返されたが、今度は、E子は「お弁当を外においておく」と表現した。そして最後につけ加えた。「その方がおいしくなるんだって。」そのことばに、私はE子が母親を受け入れていることを感じ、よかつたと思つた。

卒業式の日、並んで座っている子どもたちを前に、私は別れの挨拶をしていた。私の前にいたE子が、突然大声で叫んだ。「せんせー、先生も一緒に小学校に行こう。」私は何よりも嬉しかった。



# 『ドリトル先生航海記』考

動物が活躍する

子どもの文学の魅力を探る

首藤美香子

子どもの文学には、動物の愉快なキャラクターが活躍するものが多い。『クマのプーさん』『バンビ』『フランダースの大犬』『三匹の子豚』『ひとまねこさる』『ピーターラビット』など、題名に動物名を冠するものだけでも、すぐにこれくらいは挙げられるだろう。

なぜ、子どもの文学の構成に動物が重要な役割を果たすのだろうか。動物と子どもの親近性は、どこに求められるだろうか。これらの問いは、子どもを主たる読み手とする文学と大人向けの文学との質の違いを探る上で、とても意味があることのように思われる。

しかしこの大きな課題に取り組む前に、動物が活躍する子どもの文学の魅力を探る手がかりを考えみたい。そこで本稿では、従来論評される機会の少なかった、『ドリトル先生航海記』に注目してみよう。

私自身、初めてこの作品に出会ったのが、語り手

の少年トーマス・スタビンズ君と同じ十歳のころ  
だったからだろうか。ドリトル先生の本を手にする  
度に、待ちこがれていた夏休みがやつてきたような  
解放感で、胸踊らせたものだった。世界で唯一人動  
物語を話せる医学博士にして、大博物学者である  
ジョン・ドリトル先生とその家族の動物たち、経験  
と機知に富んだ二〇〇歳のオウムのポリネシア、勇  
敢で忠義に厚い犬のジップ、食いしん坊の愛すべき  
豚のガブガブ、運動神経抜群のサルのチーチーと一  
緒の南の島の大冒険は、まさに私自身の旅でもあつ  
た。

だから私には、大航海に出かけられるトミーがう  
らやましくてしかたがなかつた。第一学校に行つて  
ないから、読み書きの宿題やら遊び仲間との付き合  
いにわざわざずに済む。トミーには、ママが疎  
んじるような、なんともうさん臭い仕事や過去を  
もつた友達、貝ほりのジョーやネコ肉屋のマ  
シュー、世捨て人のルカがいる。立派な先生の眼鏡

に適い弟子にしてもらつたおかげで、父さんの跡を  
継ぐための靴屋の修行を積まなくてもいい。トミー  
は、普通の子どもたちを縛るもの、学校や教室の仲  
間、家族からもまったく自由で見知らぬ世界へと旅  
立つことができるのだ。

では、この怠け者やろくでなしを意味する”ドリ  
トル“先生のお話しさは、どうやつて生み出されたの  
だろうか。

作者のヒュー・ロフティング（一八八六—一九四  
七）は、イギリスのメインヘッドに生まれ、小さい  
ときから自然や動物が大好きだつたという。事もあ  
ろうに、押し入れのなかに自分だけの小さな動物園  
をつくり、家族をびっくりさせたこともあつたらし  
い。十六歳のときアメリカに渡り学問を修めた後、  
土木技師としてカナダ、アフリカ、キューバの鉄道  
建設に従事した。動物と人間の共生を主題とした作  
品を書くきっかけとなつたのは、第一次世界大戦で  
アイルランド将校としてオランダに出征していたと

き、戦地から一人の子ども（エリザベスとコリン）に送った絵物語だったとされている。帰国後も、せがまれるまま子ども達の就寝前にしてやっていたお話を、偶然ある詩人の目にとまり、出版の運びとなつたらしい。

『ドリトル先生航海記』（一九二二）はシリーズ十二作のうちの第二作目にある。この作品は『ドリトル先生』シリーズに共通するおもしろさのエッセンスが凝縮していると思われる。したがつて要約するには難しいが、とりあえずあらすじをたどってみよう。

そんなとき、かねてから紫ゴクラクチョウを使ふに通信していたロング・アローがクモサル島で消息を断つたとの知らせが入る。ロング・アローは、各地を放浪する博物学者で、ダーウィンよりもキュヴィエよりもすぐれているとして先生が敬愛しているインディアンであった。海底の秘密をさぐる次の航海の行き先は、偶然にもこのクモサル島に決まる。

おり、庭には一匹で二つの頭をもつオシツオサレツの珍獣などが住む動物園があり、すっかり心を奪われたトミーは、先生の弟子となり博物学の勉強に励むようになる。

希尔のダブダブを中心に動物たちがすべて管理して家路に向かおうとして、どんとぶつかつた相手がドリトル先生だった。大けがをしたリスを救えるのはドリトル先生しかないと伝え聞き、先生が旅行から帰つてくるのを待ち焦がれていたトミーは、早速先生の家を訪問する。先生の家は、家政婦役のア

密航者の邪魔が入りして旅は最初から困難続

きだが、途中水族館から脱出したフィジットという魚から、大ガラス海カタツムリの存在を教えられる。大ガラス海カタツムリこそ先生が探していた貝で、アマゾン川の川口そばの「深い穴」に住み、七万年以上も生きつづけているという。

悪天候で難破しながらも、「ドリトル先生といっしょなら、いつだって安全です。」「先生は、いつも運のいいお方です。よく困難に出会いますが、たいていは、終わりについようよくゆくようになるのです。」というポリネシアの言葉どおり、無事クモサル島に到着する。

一行は、カブト虫のジャズベリーの足に結び付けられていた葉に助けを求めるロング・アローの絵が記されていることに気付き、ロング・アローらが閉じ込められている鷹頭山の洞窟を見つけ出す。みんなの協力で洞窟をふさいでいた岩戸はまつぶたつに割れ、二人の大博物者の劇的な会見がワシ語で行われる。

クモサル島での先生は、浮島となつて南極ちかくまで漂流している島をくじらに頼んでもとの位置に返してもらつたり、ポプシペテルの民族に火の文化を教えたり、隣族バグ・ジャグデラグとの戦争の仲裁を行つたり、病人の治療にと忙しい。とうとう選挙で王様に選ばれてしまう。即位式の日、ささやき岩と呼ばれる劇場で先生が王座についた瞬間、伝説通り火山にかかる石が噴火口にころがり落ち、クモサル島を浮かせていた空氣室を破り、島は静かに沈み漂流をやめる。

良き王様として政治に専念しはじめた先生は、ますます博物学の研究のひまがなくなり、故郷バドルビーに帰る見込みがなくなる。しかし、島の海岸に大ガラス海カタツムリが傷つき横たわっているのを見つける。イルカ、ウニ、ヒトデの通訳を介して大ガラス海カタツムリと会見した先生は、ポリネシアの計略通り、その透き通つた真珠貝でできた殻にのつて海底を散歩しながら、クモサル島を後に旅の

目的を達成したのであった。

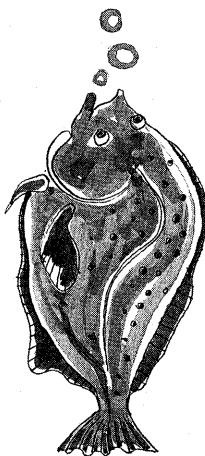
さて、この『ドリトル先生航海記』の全体を貫く特徴は次のようにまとめることができよう。

まず、動物との不思議な共生が実現するのは、ドリトル先生が動物語を話すことから、合理的な解釈が得られよう。つまり、物語では動物が擬人化されているのではなく、リアリティのある世界として構築されているのである。

次に十歳の子どもの目を通して、新鮮な輝きに満ちた驚異の世界が描かれる。特に先生の偉大さが際立ち、その魅力をさまざまに引き出しているといえよう。トミーにとって、先生は人間嫌いで経済観念のまつたく欠けた、世の常識からはずれた人で、動物の救済と博物学の研究に純粹に没頭する理想の教師として映る。そして「トミー」とも「坊ちゃん」とも呼ばず、「スタビンズ君」と対等な仲間として扱ってくれる。西欧世界の外側に生きる旅先の「無知で野蛮な」住民には、近代文明（医学・

教育）がもたらす幸福を与えようと尽力する。いつもは静かで親切だが時として大胆不敵な戦闘者ともなり得る。

だからトミーは、そんな先生と動物たちの手厚い保護のもとで、危険や苦難に直面しないようになっている。少年の旅は、絶対的な権力で存在を脅かす父（神）への謀反でもなく、グレイト・マザーの呪縛からの逃亡でもないために、通過儀礼を経ての成



長は期待されない。もちろん、少年を厄介な心理状況に追い込む性愛の問題に目覚めることもない。

さらに付け加えるなら、この物語にあふれるユーモアは、人間性に対する不信を表明したり、社会の欺まんや矛盾を摘発し、日常性の基盤を揺るがすほどの衝撃力はもたない。

一言でまとめるなら、物語を通して安定した調和的 세계가 紡がれている点が大きな特徴といえよう。だから、何も怖いことやイヤなことが起らなければ安心して読めるのが、この本の最大の魅力といえるのだ。

では、次に動物が活躍する場面を三つほど挙げて分析してみよう。

世捨て人のルカの無実を証明するため、事件の一部始終を見守っていた飼い犬のボップが、証言台に立つ場面をみてみよう。そもそも、こんな意表をつく設定が可能となつたのは、先生が裁判の聴衆の前でボップの通訳を買って出たからである。ちなみに

先生の力量を試すために、裁判官の犬に裁判官が前日食べた夕食のメニューを尋ねる試験がある。この場面のおもしろさは、動物からみた人間世界が暴露される点にあろう。人間の悪巧みを真摯な眼差しが見つめていたことに内心動搖させられ、とりすまし法の番人の俗物的な一面を揶揄する犬の茶目気に脱帽してしまう。この他にも動物の身の上話が多く紹介されるが、人間世界が動物たちによって反転させられる驚きが、笑いを誘うのだろう。

また先生が、自由を奪われて幽閉させられたり、人間の都合で酷使させられている動物を救助する挿話が必ずといっていいほど盛り込まれている。例えば、闘牛を動物虐待だと憤慨する先生は、牛たちと共に謀して闘牛をやめさせようとするくだりがある。読み手によって受け止め方は違うだろうが、私の場合、動物愛護の主張に共感したというよりも、異国の大舞台での先生と牛たちの一大パフォーマンスに感激した。人間と敵対関係にあるとされ打ち倒すべ

獰猛な動物も、先生の前ではおとなしくなつてしまふ。動物の権利を擁護して、一見フェアになつたかにみえる関係も、実のところ先生の動物に及ぼす支配力を顕在化してしまうのではないか。動物愛護の試みが中途で放棄されてしまうのも、なかなか示唆深いといえよう。

それから、この『ドリトル先生航海記』では、オウムのポリネシアの活躍が目立つ。そもそも先生の動物語の練習を手伝い、他の動物とのコミュニケーションの媒介者となつたのが、このポリネシアであり、トミーの勉強の指南役である。二〇〇歳に近い年齢ゆえに、世俗の知にも富み今回の旅行の推進者であった。旅の資金を調達したのも、クモサル島からの脱出を可能にさせたのも、ポリネシアの機知による。オウム講和条約の名にも残されているように、実践力にも優れ、戦争の際には援軍をひきつれて敵方の耳をギザギザにかじつて、味方の危機を救う。

さらに詳しく、作品が登場してきた一九二二年前

こうしてみてみると、冒險の実質的な統率者はボリネシアであつて、ドリトル先生は何もしていないことがわかる。子どものように無邪気に好奇心をはばたかせるのみだ。新たな言語を習得し、前人未踏の地を探索し、生物の固有の歴史を記録・集積するのみだ。意地悪な味方をするならば、この地球上の空間と時間を可能な限り掌握しようとする、大変な野望の持ち主ともみてとれよう。

動物と人間の共生が描かれた『ドリトル先生』シリーズは、二つの世界大戦の狭間にあって、平和を希求した作者の政治的理念が反映されているとの評価が従来なされてきた。戦争を、同じ人間の間で意志の疎通がはかれないことから生じた悲劇ととらえなるならば、あらゆる生命とのコミュニケーションを望むドリトル先生の創出は、世界をひとつの中葉で結ぶエスペラント語の考案者、ザメンホフの理想に通じるものがあろう。

前後の社会的背景に目を向けてみよう。一九二〇、三〇年は、近代動物園の歴史においても、もっとも華やかな時期にあるという。一八二八年に開園されたロンドン動物園や一八九五年のニューヨーク動物園に見るような、動物を種の法則に従わせて分類し柵に閉じ込めて展示公開する方式に疑問がもたれはじめる。一九〇一年にハンブルグ郊外のステリンゲンに設立されたハーゲンベック動物園は、①採算を度外視して大規模な動物捕獲隊を各地に派遣し、②熱帯の動物をヨーロッパの気候に馴化させる方法を考案、③動物を心理的に誘導する調教法により動物のショウビジネスを成立させる、④無柵式の動物舎をつくりだし、それらを巧みに組みあわせることにより壮大なパノラマを構築する、⑤動物の展示では多摩動物園がその最初の実践例）動物の生態へと配慮を視覚的に演出する、動物園経営の出現が、

「ドリトル先生」シリーズにどのような影響を及ぼしたのか、ここで性急な判断をくだすことは避けたい。また、この一例から示唆される動物と人間の関係の変化が、子どもの文学にどのような新しい可能性を切り開いたのか、疑問は深まるばかりである。

しかし、こうした動物園経営の歴史的側面にも目を向けない限り、動物作品の魅力は解明できないのではないだろうか。

『ドリトル先生航海記』のあの、動物と人間との裏切られることのない信頼関係で結ばれた閉ざされた至福の世界は、シリーズ後半でどのような展開をみせるだろうか。初期の作品と比較して、ドリトル先生の月旅行は暗い影をおとしているかに見え、動物と人間との安定した調和的世界は内部から破綻しかけていくようにも思われる。それはなぜなのか。動物の活躍する子どもの文学の魅力を探る私の旅は、まだまだ続きそうだ。

の配慮を視覚的に演出する、動物園経営の出現が

# 保育環境としての施設・設備に関する一考察

## 大正期の幼稚園を中心にして

### (2) 東京女子高等師範学校附属幼稚園および旭東尋常小学校附属幼稚園の保育室に見られた教育実践

永井理恵子

#### はじめに

本報告は、幼稚園教育・保育所保育の諸環境の中から特に幼稚園舎およびその室内環境設定に焦点をあて、教育実践との関連に注目して考究を進めながら我が国におけるそれらの歴史的背景の一端を辿ることを目的とした考察である。本考察は全三回にわたっておこなうものであり、本報告はその第二回報告である（本考察全体の目的・構成については、第一回報告（11月号）を参照して頂きたい）。

今回の報告では、大正期における幼稚園の保育室の室内環境設定と、教育実践の様子とを見る。事例とする幼稚園は、東京と岡山に設立された幼稚園である。東京の幼稚園は第一回報告でも取り上げた東京女子師範学校附属幼稚園であり、岡山の幼稚園は岡山市内に明治初期に設立された旭東尋常小学校附属幼稚園である。東京女子師範学校附属幼稚園の明治期の教育内容・方法については第一回報告を参照頂きたい。旭東尋常小学校附属幼稚園の設立については本報告で後述する。

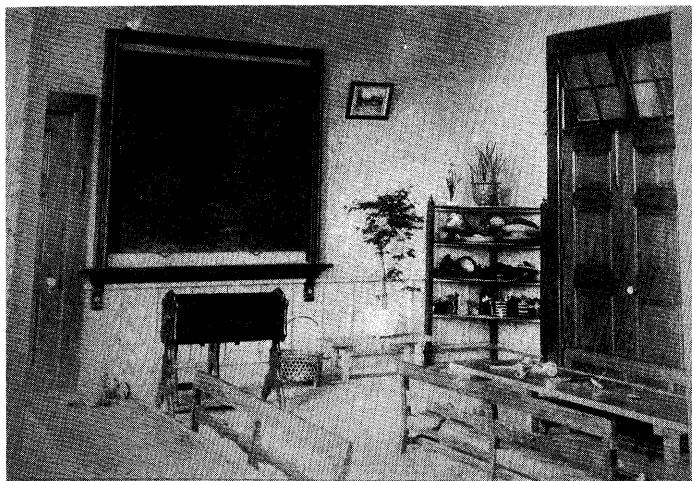
## 一・東京女子師範学校附属幼稚園における大正期の実践の展開（保育室における活動）

一では、大正期の東京女子師範学校附属幼稚園における保育室の室内環境設定と、保育活動の展開の様子とを、大正十一（一九二三）年度に撮影された二枚の写真をもとに考察する。

まず写真①を見よう。写真むかって右の扉は廊下に通じる扉であり、左の扉は隣室に通じる扉である。廊下への扉の上部には換気窓が設けられている。また、室前方の壁面には上げ下げ式の黒板がとりつけられており、その高さからみてこの黒板は、当初は保母が使用するためにとりつけられたと考えられる。なお、大正十二（一九二三）年まで使用されていた園舎は明治十九（一八八六）年に建てられた園舎であるから、この写真①は第一回報告中の図③に示した園舎と同一である。

室内には幼児用の机と椅子を始めとして、黒板前に置かれている鍵盤楽器・柄つきの籠・盆栽・三角棚・その上に置かれた植木などがある。これらのものは第一回報告で示した図④に描かれているそれらと同一の形状をしており、両者を照合するところ幼稚園では明治中期に使

▼写真① 東京女子師範学校附属幼稚園保育室内部  
(大正11年撮影)



用していたものを大正末期まで大切に使用していたこと

がわかる。ここで特に注目したいのは、幼児用の机と椅子の配置である。机は図④に描かれていた二人用の恩物机を使用していることに変化はないが、机は黒板のある方向に前向きに並べられるのではなく、横向きにつなげて並べられ、二人用の椅子が横向きに配置されている。

この新しい並べ方では、幼児は教師と対面して他の幼児の背中を見て座るのではなく、幼児同士が対面して座ることになる。このように大正十一年の東京女子師範学校附属幼稚園では、明治期の同幼稚園で実践されていた、当時の小学校の教場風の机椅子の配置をとりやめていたのである。

写真①に見られるような幼児同士が対面する着席方法は、今日の幼稚園・保育所においては一般的であり、特に目新しい方法ではないだろう。しかし大正期の幼稚園において幼児対面式の着席方法がとられるに至った背後には、教場式着席方法に対する幼児教育関係者らの問題意識の昂揚と、現場の保母らの積極的な努力とがあつた。

この東の談話記録の発表から七年後の明治四五（一九一二）年の春に、新しい机椅子の配置と新しい形状の机の導入が、幼稚園の現場においておこなわれたとの記録

机椅子配置についての主張を記録する史料は、明治三八（一九〇五）年十一月発刊の雑誌『婦人と子ども』

（第5巻第12号）に掲載された東基吉の談話記録「幼稚園児の机とその排べ方」が最も古い。当時、東は東京女子師範学校附属幼稚園の主事（今日の園長）を補佐する職である幼稚園批評掛を務めていた人物であった。この談話において東は図④に示されているような机椅子の配置の問題点について、室の雰囲気が教場的になること、保育が一斉的になること、室の空間が机椅子で占領されてしまうことの三点を指摘した。そしてその改善策として、八人で一台の机に向かつて座るように配置することを挙げ、このような新しい着席方法をとるのに適した机として八人が共用できる大型の机が望ましいと述べた。

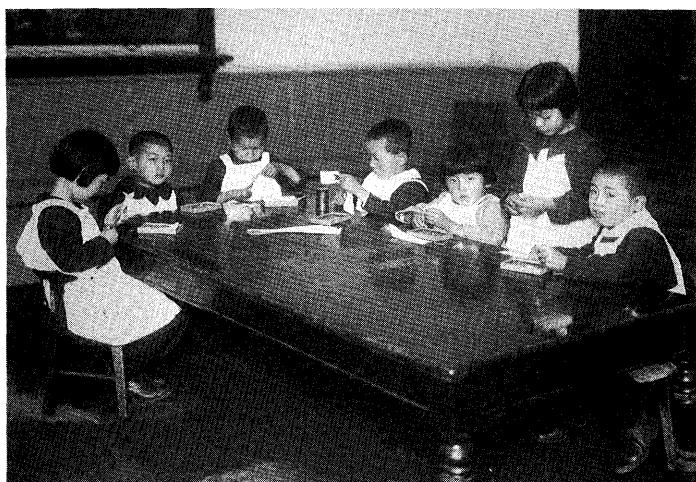
がある。その幼稚園は当時、京阪神連合保育会所屬神戸保育会で中心的立場にあつた神戸市立神戸幼稚園であった。神戸幼稚園は大型の半円形の机を二台導入し、この机の使用状況はその実状を參觀した倉橋惣三の小論「保育上の新しい試み 神戸幼稚園の大円形机」（明治四五年十二月発行『婦人と子ども』第12巻第12号所収）に発表された。

幼児教育界におけるこのような新しい発想と試みを経て、東京女子師範学校附属幼稚園の机椅子の配置方法も、写真①に示されたような方法に変容した。そして机も新しいものが購入されたことが、次に示す写真②からわかる。

この写真②も写真①と同様に大正十一年に撮影されたものであるが、室内の状況から見て写真①とは異なる室であると考えられる。七人の幼児が、紙切り・珠繋ぎなど幾つかの活動を、ひとつの大机に向かっておこなっている。この写真は東京女子師範学校附属幼稚園においても、大正末期にはこのような自由な着席方法がと

られるようになり、それに伴つて机の形状も変容している。

▼写真② 東京女子師範学校附属幼稚園保育室における活動（大正11年撮影）



ところで先の神戸幼稚園における大円形机の導入のように、大正期になると全国各地の幼稚園において新しい教育内容・方法の研究開発・導入が積極的におこなわれるようになった。東京女子師範学校附属幼稚園における教育内容・方法を他の幼稚園が追従的に模倣するに留まっていた明治時代とは異なり、各幼稚園が独自に研究したり、地域で研究グループをつくって学び合ったりしながら、その幼稚園独自の教育実践のありかたを探求する時代となつた。次の二と三では、東京女子師範学校附属幼稚園の教育内容・方法に学びつつも、独自性を生かした実践をおこなつていた幼稚園のひとつ的事例を見ることがある。

## 二・旭東尋常小学校附属幼稚園の歴史と、大正期の園舎

本考察でこの幼稚園を事例のひとつとして選択したのは、その大正期において使用していた園舎の形状や、教育実践の方法が非常に特徴的であったためである。二で

はこの幼稚園の設立の背景と、大正期に使用した園舎の形状について簡単にまとめておく。

旭東尋常小学校附属幼稚園は、現・岡山市立旭東幼稚園の前身である。それは明治十八（一八八五）年四月に、岡山県師範学校附属小学校訓導の新藤貞範が寺の境内を借り、無資格者を保母として開園した私立幼稚園であつた。明治期のこの幼稚園は幾度も存続の危機にさらされ、場所も転々と移つたのだが、明治三九（一九〇六）年に旭東小学校が新校舎を建てる際に、同敷地内に同設計者の手によって、幼稚園のための建築が建てられることになつた。

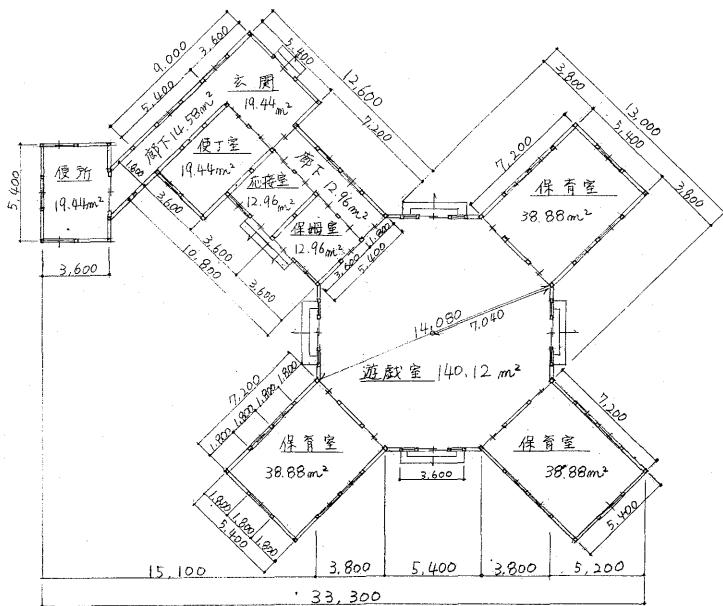
明治四一（一九〇八）年七月に新園舎において開園式をおこなつた時、園長には小学校長が就任し、五名の保母は全て有資格者であった。保母のうち二名は岡山県師範学校が明治中期に県下に招いた東京女子師範学校卒業の保母によって岡山県で養成された人物であった。

岡山県は明治四〇年代に入り、更に二名の東京女子師範学校卒業の保母を招いた。そのひとりは明治四一年四

月に岡山県師範学校附属幼稚園主任として招かれ、もうひとりは明治四二年三月に、新園舎に移つて一年も経たない旭東尋常小学校附属幼稚園に主任保母として就任したのであった。この人は折井彌留枝という人物で、大正期には市内全市立幼稚園園長を兼任して多忙な日々を過ごした。旭東尋常小学校附属幼稚園は大正期をとおして、この折井の指導のもとで新しい教育実践にとりくんでいたのである。

ここでは、大正期の実践に使用された園舎の平面計画を示す。図⑤はその平面図である。中央に八角形の遊戯室が配置され、三方に保育室が設けられている。北西の辺には保育室などの、大人が使用する室が配置されている。遊戯室からは、隣室に接続していない辺から園庭へ出られるが、保育室からは出られない。この園舎の室配置の特徴は、中央に八角形の遊戯室を配置するという、幼稚園舎には初めて試みられた全体計画と、保育室の向きが全て異なつており均一の採光がおこなわれないといふ点である。

▲図⑤ 旭東尋常小学校附属幼稚園平面図



### 三・旭東尋常小学校附屬幼稚園における大正期の実践の展開（保育室における活動）

続いてこの独特的な園舎内部の保育室の環境の設定と、活動の様子について見てみよう。

次に示す写真③は、保育室内部における机椅子の配置を示すもので、大正五年に撮影されたものである。室内には、写真の左右と中央奥の三方から陽が射している。窓の隅に三角棚がひとつ設置してある他には何もなく、室内装飾もない。

ここでもまた、机椅子の配置方法とそれらの形状に注目してみよう。机は中心角90度の扇形で、それが四台設置してある。この机は、組み合わせると大円形机になるが、この写真③では四台に分けて使用している。椅子は一人用で、23人の児童が、5人ないし6人ずつ一台の机に向かって座っている。

この机の形は當時非常に珍しく革新的な形であった。この形がどのようにして考察されたのかを辿ってみる。

と、そこに倉橋惣三の姿が見えてくる。  
円形を二分した半円机が明治四五（一九一二）年に神

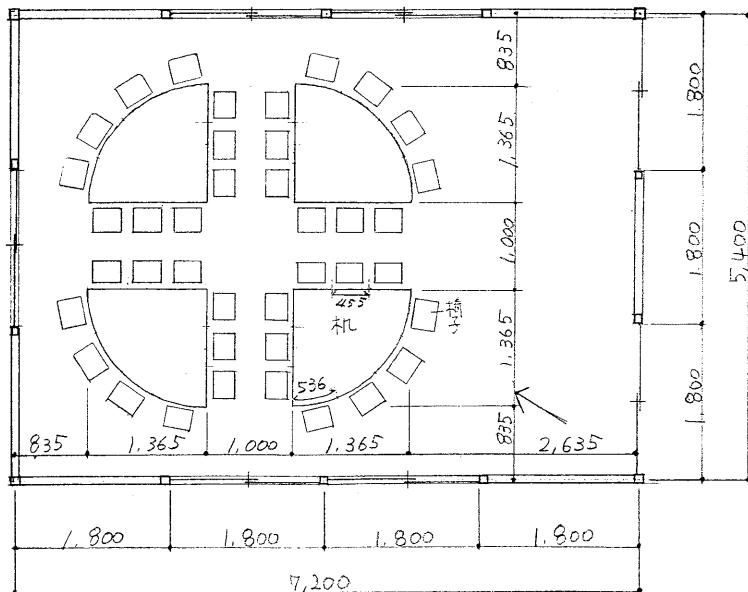


▲写真③ 旭東尋常小学校附屬幼稚園保育室内部

戸幼稚園で導入され、それに対しても倉橋物三が同年十二月発行の『婦人と子ども』において推奨のことばを述べたことは前述した。ここで加えなければならないことは、倉橋が同誌上で更に改善できる点を二点あげていたことである。すなわち倉橋は半円形の机ではなく、それを扇形机（四分の一の分割机）にしたり、中央を丸くくりぬいたりするふうが期待されると述べた。大正五年に旭東尋常小学校附属幼稚園で使用されていた扇形机は、まさにその四年前に発表された倉橋の提言を、実践に移した机だったのであった。旭東尋常小学校附属幼稚園の保母たちが何を参考にして、どのような経緯で扇形机を導入したのかは明らかではない。しかし倉橋が推奨した扇形机が岡山県下の幼稚園で早々と実際に使用されるに至つたことは、当時の地方の保母たちの教育に対する熱心な姿勢を示しているといえよう。

最後にこの新しい形状の机を導入した結果、保育室内の空間や、児童同士の距離・向きなどはどのように変化したかという点を考えてみよう。次に示す図⑥は、写真

図⑥ 旭東尋常小学校附属幼稚園保育室内配置図



③の室内の机椅子の配置と幼児の位置を示したものである。机の寸法は前述の神戸市立神戸幼稚園の大円形机の寸法（『婦人と子ども』第12巻第12号・明治四五年十二月発行に記載されている）を参考にした。椅子の数は、机に収められている椅子の数も加えてあるため、写真の幼児の数よりも多くなっている。

まず室内の採光について考え方。この扇形机の導入を容易にし、その使用を効果的にしたひとつの要因は、この保育室の三方に窓があつたことである。様々な方向を向いて座る幼児が生じる扇形机は、室の片側にのみ窓がある保育室では、採光の点で導入が難しい。今日のように照明で光度を完全に補うことができる時代と異なつて、当時は円形・扇形机の導入の壁として採光の問題が存在していた。しかしこの旭東尋常小学校附属幼稚園の保育室は三方に窓があり、採光は充分だった。

次に室内の机の占める面積と、空きスペースとの関係を見る。この室内は室面積 $38 \cdot 88\text{m}^2$ のうち机の占める面積は $5 \cdot 85\text{m}^2$ で、室面積の約15%である。この割合は、

本考察第一回報告で示した図②における机の占有面積とほぼ同じである。それにもかかわらず扇形机を使用するところ、保育室の出入口付近に $14\text{m}^2$ 少々の空間がとれ、且つ机の間隔も $83 \cdot 5\text{cm}$ とれることが、図⑥に示されている。共用机は、限りある空間を効果的に使用するのに適した形であるといえる。

本考察の最終回となる次の第三回報告では、旭東尋常小学校附属幼稚園の遊戯室における実践を考察する。

\*本報告は、平成三年度修士論文の一部を加筆・修正したものである。

—つづく—

(東京大学大学院 博士課程在学)  
ゆかり文化幼稚園 非常勤講師

# 婦人宣教師、ミセス・プラインの 「おばあちゃんの手紙」(5)

～アメリカン・ミッション・ホームの  
創立者の人～

小林 恵子

六、 横浜 一八七二年二月二十六日

故国の愛する幼い孫たちへ

ママとパパがジョージアに行つて留守だということ  
で今日は私が家族の一人として長い手紙を書きま  
しょうね。

私はあなた達がそんなにお手伝いのできる子ども  
になつたことを聞いてとても喜んでいます。そして、  
子どもたちの誰もが欲しがるようなキャンディ  
や小さなものなどを買わないので貯金箱にお小遣いを  
ためてくれていると聞いてほんとに嬉しい。今、私  
たちは大きな家を建てる準備をしています。それに  
はとても多くのお金が必要です。そして部屋の  
内部をよく整えるのには又もつとお金が必要です。  
私は考えるのですが、もしあなたの達やアメリカの子  
ども達みんなが毎日ここにやつて来る日本の子ども  
達を見る事ができたら、あなた達はきっとこの子  
ども達が好きになるでしょうね。そして、この子ども  
達を見るために建ててきな建物や教室を建ててあげるた

めに何か手伝いたいと思うでしょう。この子ども達はハンサムではないし、とても変わつて見えます  
が、おとなしくて素直で、本当に熱心に勉強するの  
です。ですから世話をするにも勉強させるのにも手  
がかかるないです。

さて、今日の手紙は日本のお正月について私の見  
たことをお話ししましようね。ここのお正月はアメ  
リカとは時期が同じではありません。どうしてかと  
不思議に思うでしょうね。でも考えてみてくださ  
い。この国は何百年もの間、国を閉ざしていたので世  
界の他の国で何が起こっているのか知らないで過ご  
してきたのです。ですから人々は何も知らないし、  
他の国の人々が何をしているのか知らうともしない  
できたのです。いまから数年まえに外国人が日本に  
来るようになつたとき、この国の人々は何世紀もの  
間これまでやつてきたと同じようなことをずっと  
やつていて他の国とは随分違つているということが  
わかつたのです。すべての先進国が年とともに変化

し進歩していく間、日本はまるで眠つたように昔  
のままでした。これが日本のお正月が私たちの国と  
は時期的に違つているという理由の一つです。でも  
この国はまもなく大きく変わっていくだろうと私は  
思います。日本人は今や目覚め、世界の国々と同じよ  
うになることを望むようになってきたのですから。

さて、お正月のことですが、日本のお正月は毎  
年、二月にやつてきます。でも、その日は月の満ち  
ひきによつてきめられ、少しずつ違うのです。お正  
月を祝うことはとても大切な行事なのでたっぷり一  
週間はかかります。人々は贈物をあげたりお互いに  
家を訪問したりします。これは私たちがアメリカで  
やつているのと同じなので、ある人はこの習慣が日  
本から始まつたと思つています。何百年もまえに貿  
易に来ていたオランダ人がその習慣を持ち返り、オ  
ランダからアメリカに渡つていったと思つているの  
です。これがどれくらい本当かどうか私にはわかり  
ませんが私たちが長い間やつてきた習慣をこの国の

人々が守り続いているのをみるのは少し不思議な気がします。でもその習慣をみると私はとつて大変楽しいことだし自然な行事なのだと思いますよ。

ここでは家がとても狭いので人々は家のなかで何かしているのと同じくらい外の路地でいろいろな事をやって生活をしています。そしてお正月に町を歩くとすべてが華やかで生き生きして見えます。男の人も女人の人も誰もが一番よい着物を着ています。そして実際のところ、貧しい人たちは普通この時期をのぞいては新しいものを買うことができないのでお正月に新しいものを揃えるのです。お正月の一週間は殆ど仕事はしません。でもいろいろな遊びや楽しいことが行われます。遊びの主なものは女の子は人形あそび、男の子は凧あげで羽根つきは誰でもやります。私は誰でもと言いましたが、これらの玩具や遊びは男の人だろうが女人の人だろうが大人がまるで子どものように嬉しがって遊んでいます。町通りはこうした遊びをする人々で一杯で、みんながそ

れぞのもので遊んだり小さな子どもたちがよく遊べるように手伝つたりしています。

人々があげている凧は本当に面白いものです。みな一風変わった形をしています。なかには人や動物の大きな頭のようなものもあり、ほかには、牛や鳥、なかでも皆がとても気にいっているように見えるのは悪魔や惡靈をかたどつた凧です。それがどんな風変わりで奇妙に見えるか、それらの凧が天高く空に舞いあがっているときにあるで本物のように見えるかをあなたたちにわかつて貰うのは難しいことでしょうね。これらの多くの凧には一風変わった装置がついていて、それに風が当たるとやさしい音楽のような音をたてるのです。たくさんの中の凧がいっせいに空にあがつて高い空の雲にむかつて音楽を奏でているのを聞くのは奇妙ですが本当に面白いものです。私たちの小さな子どもたちにも幾つかの凧を買ってやりました。子どもたちはその凧をあげて大喜びしています。

それから日本の人形について風変わりな慣習ですが、これは私たちが想像できないほど奇妙なものであります。それらの人形はまるで本当の赤ん坊や子どものように見えます。私が街を歩いていてこの人形を抱いている人に会うと本当の赤ん坊かしらとだまされてしまう位です。お正月やその他のときに人形遊び



▶ 人形で遊ぶ日本の女性

をする以外に「雛祭り」と呼ばれる行事が四月に二日間あります。(旧暦での四月) この日はすべての女の子たちや大人の女の人们までがとても楽しいときを過ごすのです。この人々たちはお人形を抱いて外を歩いたり、人の家を訪問したり人形のために新しい着物を買って着せたりします。その様子はまるで人形が生きている子どもであるかのように大切に可愛がるのです。

あなたたちは大人の女人人が人形遊びをするなんておかしいと思うかもしれませんね。でも日本では女人人が仕事をもって働くよう教育されていないし、もつと有意義に自分たちの時間を使うように教られていないのです。この国には女子たちのための学校がないのです。ですから女子たちは自分たちの精神を高めより充実させるよう学ぶことなく、また自分たちの時間を楽しく有意義に過ごす方法を教えられずに大人になってしまうのです。可哀そうに日本の女性たちは無目的に時間を過ごしていく、

人形で遊ぶ事はこの人たちにできるせめてもの無害な楽しみなのではないかと私は思います。

お正月の行事のなかでもう一つ変わっているのは家々の飾り付けの仕方です。どの家の前にも低い竹の飾り物が置かれます。竹の葉は小さくて美しく明るい緑色をしていますが、それが風に吹かれ愛らしく波うついるさまは街ゆく人々の目に薄暗く狭苦しい家々をとても明るい快活なものに見せてくれます。それから家々の玄関の軒先にわらで作った長いふき飾りをつりさげます。それもまた風が吹くたびにさらさらとゆれるのは奇妙ですが素敵です。もう一つの飾り物はとても奇妙なもので日本人の迷信好きな性格の一端をあらわしていると思います。これについてお話ししましょうね。

人々は自分の家の玄関あたりに（どの家も正面の側は全部開けていて夜や嵐などにスライド式のドアで閉めるようなっています）炊いたご飯を山の形かピラミッド型に大きく積みあげます。そして、その

てっ�んに幾ほんかの美しいわらを置き、その上に苦みのあるみかんをのせ、次にカニ（エビのまちがえではないかと思われる）を、そして一番上に干した魚の皮を置きます。

それにはこんな意味があるのです。“飯の山は大海原の彼方にあると人々が考えている”極楽浄土”、つまり人が死んだときに行きたいと願つてゐる永遠の幸せの国をあらわしています。わらは悪霊から身を守るため、みかんは子孫が代々栄えることを意味しています。これによつて人々は自分たちの神々に自分たちや子どもたち、子孫までが極楽浄土に行けるよう、また、みんなが生きている間も悪霊から身を守つて貰えるようお願いなのです。カニは年をとつて体を折り曲げて這つて歩かなければならなくなるまで長生きができるようにとって願いをしめしています。そして魚の皮は人々が贈物や挨拶をするとき好意のしるとしていつも使うのです。このように神々への尊敬と好意をあらわすことによ

よつて神々は人々の願いをかなえてくださると考えているのです。

こういう習慣はいかに人々の心が闇のなかで閉ざされきたか、そして死後の未来に自分たちが幸せになることを追い求めてきたかを示しています。みんなは私たちの神の素晴らしい贈物について知らないのです。イエス・キリストをとおしての永遠の命ということも知らないのです。

でも今日の手紙はあまり長くなりすぎたのでこのくらいで終わることにしましょうね。おばあちゃんのお願いはあなたたちが毎日私のために祈つていてくれるという事でそれを聞くことが何より嬉しいことです。それから神がこの学校を多くの人々が来て真理を学ぶことのできる場にして下さるように、また人々がおろかな慣習を捨てるように祈つて下さい。神はもうすでに私たちのお祈りに答えて下さっているのです。なぜなら私たちがここでこんなに幸せなホームを持つことができ、こんなに多くの人々

とともに神を賛美することができているのですから。

いつも、あなた達を愛しているおばあちゃんより。

\*

七、 横浜 一八七二年四月十八日

愛するキティーへ

私たちの子どものなかでノナと呼んでいる小さな女の子のお話をしましちゃうね。ノナというのはこの子の本当の名前ではないのです。この子のお父さんは外国から来た人でお金は沢山もっているのですが、キリスト教の国から横浜にやつてきた多くの良くないう人たちと同じように悪い人です。そしてお酒ばかり飲んでいて何もしようとなないので。でもお酒を飲んでいないときには自分の小さな娘を可愛がつているようですし、娘の面倒を見てくれている人たちにお金を沢山あげたりしています。

この子のお母さんというのも異教徒の悪い女でノ

ナがまだ三歳にもならないときに家を出でていってしまつたのです。なんてひどい母親でしよう。そこで、この子は頼る人もなくほっておかれ、一年半もの間とてもひどい状態だったのです。氣の毒なことはこの子に親切にしてくれる知りあいが一人もなかつたことです。最も可哀そうだつたのは、この子と一緒にいた人の不注意から身体をひどく痛めつけられて片方の足を怪我し、ひとりで歩くことが出来なかつたことです。手厚く治療すれば少しは良くなるかもしれません、私たちはそう願つてゐるのですが今は他の子ども達と走ったりスキップしたり跳ねたりすることが出来ないのです。

さて、この小さな女の子は五か月ばかり前に私たちのホームにやつてきました。そのとき、この子は英語はひと語もしゃべれず理解するといふやうませんでした。そして神様のことを聞いたこともなく歌うというようないふ出來ませんでした。私はあなたたちに以前に書いたことがあります、が日本

人は歌うということをしないのです。この人たちが歌を聞いたのはクリスチヤンの人々がここに来てからではないでしょうか。私たちが讃美歌を歌うのをノナが初めて聞いたときの驚きや興味は大変なもので、それを見る私たちのほうが面白くて驚いたものです。私はじきに彼女が上手に歌を歌うようになるだろうということがわかりました。この子はとても気難しくて最初は教えるのが大変でした。が神のたすけによつてまもなく私たちの「唱う」とをするなおに聞いて従うようになりました。

今では朝早く食堂におりてきて他の子どもたちが来るのを座つて待つて朝食をとるようになります。そんなところをあなた達に見せてあげたいと思つた。そんなところをあなた達に見せてあげたいと思つます。ノナは早起きでいつも一番さきに下の部屋におりてきます。そして自分の小さな椅子に座り、とても楽しげに次から次へと讃美歌を歌うのです。

“Jesus loves me” 誌(1) “There is a happy land” 誌(2) 等々。

それから朝食が終わって朝の聖書の時間になるとノナは私のそばの座布団に座りたがり、私と同じ椅子にひざまずいて私たちの礼拝の終わりと一緒になつて「主の祈り」を口づさみます。私がお祈りをしているとき、この子が小さな手で私の手をまさぐつたり私の頬にそっと手をあてたりするのを感じるときそれは私に大きな感動を呼びおこします。

この小さくて、お利口さんで、愛くるしい女の子は五ヵ月前までは可哀そうにみじめな異教徒たちの間をたらいまわしにされたあげく見捨てられた浮浪児だったのです。

“私の可愛い小さなキティーちゃん”あなたもこの子を可愛いと思うでしょう。この子は今、こんなに楽しいホームで一緒に暮らせてイエスさまの愛について教えて貰っているのです。本当に嬉しいことではありませんか。

今日はここまでね。さようなら。

おばあちゃんより。

今回、紹介するのは一八七二（明治五）年二月と四月にミセス・ピアソンが米国の孫に書いた二通の手紙である。二月の手紙は日本のお正月について、人々の過ごしかた、飾りつけ、子どもの遊びなど、西洋人の目からみたものを生き生きと描いている。当時の正月は旧暦で二月に行っていたようで雛祭も四月と記されている。今日の飾りつけとは多少違っていたようであるが、日本人が



毎年、何の不思議も感じずに行つてきただお正月の慣習を西洋の人々がいかに奇妙で珍しいものとみたかがこの手紙から推察できる。そして、私たちの気づいてないところに不思議さや美しさ、面白さを感じとついたかがわかる。例えば人々のあげてある風変わりな形をした様々な凧が天高く空に舞いあがり、雲にむかって優しい音楽のような音をたてる装置の面白さとか、家々の玄関の軒先に藁で作つたしめ縄の房飾りが風にさらさらと揺れるさま等、迷信には批判しながらも日本の行事に見る不思議さに魅せられていることがよみとられる。

ところで、当時の日本は今や鎖国から開国への大きな変動期にあり、人々は眠りから目覚め始めたときであった。こうした時代のなかで余りにも遅れをとつていたのが日本の女子教育である。女子に学問は無益とされきて世間一般の考え方のなかで女子教育こそ緊急の仕事として着手したのがこれらの婦人宣教師たちであった。明治三年に創立されたフェリス女学校を先駆として翌年ミセス・ブラインたちの創立した横浜共立学園など、女子教

育機関の最初の開拓は多くが米国婦人宣教師の貢献によつたのである。

次の手紙は混血児ノナの養育について書かれたものである。当時の日本はとりわけ混血児を忌み嫌う風潮があり、まして、ノナのように片足の不自由な子は誰からも相手にされないので実情であった。こうしたなかでまるで本当のわが子か孫のように「私の可愛いキティーチャン」とは何と心あたたかい呼びかたであろう。この時代に人種や国境を越え、これらの幼児たちを愛し養育し、教育したこの婦人宣教師たちのことは保育の歴史のうえでは是非とも書き留めておかねばと私は思う。

(国立音楽大学)

詠①Jesus love me (主われを愛す、主は強ければ) 讀美歌

四六一番

©There is a happy land (あまりみくには いとだのし)

讀美歌 四九〇番

## \*\* ある日の育児日記から \*\*

和代 佐藤



(24)

有は六ヶ月。いよいよハイハイ開始です。  
少しずりずりと動くようになつたな、と思う頃  
敬（主人です）の田舎へ行きました。これでもう  
あつという間にハイハイ名人に。  
何しろ、十畳間三つぶちぬきの和室。昔風の家  
ですから障害物もほとんどなし。有はたっぷりと  
さあ、そうなると我が家は…。帰ってきて、ま  
ず思ったことが、「どうしてこんなにドアがあるの  
よー」。どの部屋もドアで仕切られ、収納もほと  
んど開き戸。玄関はもちろん重たいドアです。

有はたっぷりと  
はいまわってきました。  
何しろ、十畳間三つぶちぬきの和室。昔風の家  
ですから障害物もほとんどなし。有はたっぷりと  
さあ、そうなると我が家は…。帰ってきて、ま  
ず思ったことが、「どうしてこんなにドアがあるの  
よー」。どの部屋もドアで仕切られ、収納もほと  
んど開き戸。玄関はもちろん重たいドアです。

そして、すき間があれば  
指をつっこむのが赤ん坊の  
習性。ただでさえ指先にケ  
ガの絶えない有ですが、こ  
の間はとうとう、トイレの  
ドアに指をはさんで大泣きしました。ひらたく、  
白くなってしまった指をなでてやりながら、こん  
なにびったり閉まるドアでなくともいいのに、と  
うらめしく思いました。

少しハイハイすれば壁かドアにぶつかる。ドア  
は自分で開けられない。姉のあとを追つていけ  
ば指をはさまれる。ドアは  
赤ん坊の天敵です。

有がどこかでゴッチンと  
ぶつかる音を聞くたびに、  
田舎の家はよかつたと思つ  
てしまふこのごろです。



# 遊びのスクランブル交差点 (6)

## けんかの少ない遊び

### おみせやさんごっこ

仲 明 子

#### ◇ けんかの少ない遊び おみせやさんごっこ

我が家のは六畳はかつてはしとその友人T、Yの男の子（に妹のNを加えた）の遊びの場だった。それがNが四歳になって初めてできた友人Cとその姉のOの出現で、彼女の遊びの場ともなり始めたことで、狭い六畳はなじみの薄い彼らの出会い場——遊びのスクランブル交差点——となつた。

彼らはそこで冬の間毎日のようにおみせやさんごっこをして過ごした。私は狭い六畳で彼らと一緒に遊べる遊びがあったことにホッとした。そればかりか、この遊びの中ではほとんどけんかを見かけなかつた。

彼らはどうしてこの遊びの中でけんかをしなかつたのだろうか。

それをまず、彼らの六畳での出会い——けんかになつた遊びとならなかつた遊び（H4・8・2）——について探つてみようと思う。

そして、それを手がかりに、ある日の六畳に展開したおみせやさんごっこ遊び（H4・8・2）を例に、どうしてこの遊びの中ではけんかが少ないのかを探つてみ

ようと思う。

それをすることは、結果として彼らがなじんでいく過程となつたこの遊びの魅力を探ることにもなるであろう。

## ◇ 六畳での出会い

### (1)ひとりぼっちでいる不安

それぞれに折り紙をしながら六畳で、

○ Lちゃんのかおへんなかお  
しは黙つて折り紙を続けている。

○ Lちゃんのあたまへんなかたち  
しは黙々と続ける。(怒つていてはみえない)二人は黙つて続ける。

○ おばちゃん Lちゃん まだ ぴつころちゃん見て  
る?

私は見てるわよ。だって Nが好きだから 一緒に  
ねつしちゃん

○ まだ ぴつころちゃん見てるなんて ださーい。

Lは突然、折つていた折り紙をOに投げつける。そして、体ごとOにぶつかって行く。Oはその突然の剣幕に驚く。

O おばちゃん Lちゃんぶつた。こわい。

ちょうど十二時になりOは帰ることになる。Oは泣きながら書いた紙きれを、しにハイ! と押しつける。(図1)

L こんなのはいらぬ! とくしゃくしゃにして投げつける。

Oが帰つた後で昼食の準備をしている私の所へ一枚の紙を持つて来て、

L おかあさん これ Oちゃんがきたらわたす。(図2)

読んでみてふき出してしまう。Lはそれでも気持ちがおさまらず、さらにまた持つて来る(図3)

Oは折り紙を折るのが上手で大好きなので、いつもなら楽しい気分で遊べるはずだった。けれども、この日のOは六畳にもLにも慣れていたかった。だから、黙々と折つているLとむかい合つて自分も黙つて手を動かしてみると、Lに無視されているように思われてきて、だん

もうすとひじ  
ませんなつみ

▲図1 O(なつみ)の手紙

なつかんあなたの  
いひうち紙はとれません  
ただばあかれて  
ござります

▲図2 Lの手紙1

なつかくそくなに  
わがままにならないで  
そしてあなたが  
だれ!といつたこと  
をほくはゆるしませ

▲図3 Lの手紙2

だん安心して折り紙を楽しむ気分になれなくなつてい  
た。ひとりぼっちでいるような不安に陥つた。  
Oはなんとかしてしとかかわりを持ちたいと思つた。  
そして、自分がしに認められていることを確かめて安心  
したかった。そこでつきつきに話しかけてみたがしは

黙々と折つているばかりである。それどころか、いきなりおいかかつてきた。  
こんなとき、TやYがそばにいたら「あーあ、しちゃんを怒らせちゃった。しちゃんって怒るとこわいんだよね。」と言つたであらうし、こんなことにはならなかつ

たであろう。

けれども、まだつき合いの浅いOは、外で会うといつもにこにこしているLしか知らなかつた。それにOには、いやなことがあってもすぐには怒らなかつた。それから、Oは自分がつづきに失礼なことばを重ねたことでついにLを怒らせてしまつたことに気づいていなかつた。

Oはしが突然怒り出したことに驚き、その剣幕に恐れをなし、体あたりしてきたことを非難し、「もうあそびにきません」と置き手紙をして帰つてしまつた。

Lも女の子であるOちゃん流の会話に慣れていなかつた。その上、Oが自分の非をあやまらないどころか、「ぶつた」と非難されたのだからおさまらない。そこで、抗議の手紙——Lは「ださい」と言われ腹を立て、それを「ぶつた」と言つたOを「わがまま」と怒つていた——をつづぎに書いた。

けれども、これらの手紙はOの手元に渡らずに終わつた。結局、OはLがどうしていきなり「ぶつた」のかを知らずに終わった。

一方Lも、Oが慣れていない六畳でひとりぼっちでいるような気がして、(Lに遊び相手として認められることを確かめて) Lと一緒に遊んでいる気分になりたくて話しかけてきたことに気づいていなかつた。

このように、Oが遊びの場で安心感に支えられて遊べなかつたことで二人はけんかをしてしまつた。この日、なじみの薄い二人は往き違つたままで終わつてしまつた。

## (2) 認められている安心

L、T、O、N、が集まつた六畳ではすころくが始まつた。(図4・5) このすころくを初めてやるO、既にそのおもしろさを十分に知つてゐるL、T、N。けれども、今日のTはついていなかつた。振つても振つても台風やうずに巻き込まれ、島のまわりをぐるぐるまわるばかりで先へ進めない。LとOはそんなTをひとり残してどんどん先へ進んでしまつたし、Nはさつさと抜けてしまつた。それでもTは途中で投げ出すことをせず、先頭のOが上がるまで加わ



- いちばん早く「ゴール」に着いた人が勝ちです。
- ジャンケンで勝った人から、右まわりにゲームを進めます。
- 自分の番がきたら、緑色のさいころを振って、出た自分の指示に従ってください。
  - 1…コマを1マス進めます。
  - 2…コマを2マス進めます。
  - 3…コマを3マス進めます。
  - 4…コマを4マス進めます。
  - \*…青色のさいころを振り、出た自分の指示に従ってください。

全員、1つ手前の島に戻ります。  
(島にいる人は戻らなくてOKです)

全員、1マス進めます。

1番先に進んでいる人と同じマスに進めます。

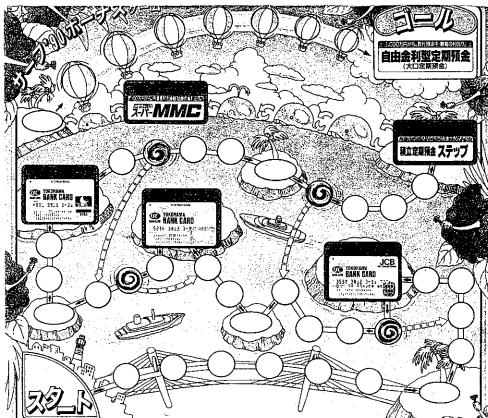
次のくはまぎんのマスに進めます。

5…コマを5マス進めます。

6…コマを6マス進めます。

◎ このマスに止まったら、点線の矢印→の先のマスにコマを戻します。

▲図5 すごろくの説明



▲図4 人気のすごろく  
(横浜銀行サービス品より)



▲図6 Tが後に「げえむせんたあ」で作ったすごろく

り続けた。そして、ちょうど五時になる時計の針に合わせたよう、「ぼくもう帰る。」と言つた。

すごろくはその頃の六畳で人気の遊び道具だった。だから、すごろくの箱の中には雑誌の付録やら何かのおまけやらのいくつものすごろくが入れられ遊ばれていた。それらの中でも、最近近くの銀行でもらってきたこのすごろくは、さいころを二つ使う目新しさに加えてそのことで生まれる意外性がおもしろく、当時のL、T、Nは毎日のように夢中でやっていた。

ところが、すごろくには勝ち負けがあり誰にとっても負けるのはつらい。幼いNはその日も途中で抜けてしまった。けれども、この日のTは辛棒強かつた。

何度もやっているTは、「台風」が出たら振った本人だけでなく全員が手前の島まで戻らなくてはいけないことも、一番遅くても次の一振りで「いるか」が出たら一番先頭のコマまで進めることもあって、最後まで勝負がわからぬことを知つていて。

だから初めのうちは余裕もあり、笑つたり軽口をたたいたりしていたが、たび重なるつきの無さに次第にことばも少なくなつていった。私はそんなTに同情していた。そんなにもTはついていなかつた。

私はまだ六畳に慣れていないOがこのすごろくのおもしろさを十分に味わつて、これからも六畳に来るきっかけになつてほしいと思っていた。その点からもTが途中で投げ出さないでほしかつた。だから、Oが上がつたときは私はホッとしていた。

普段のTを知る私はその日の辛棒強さに驚かされた。(後日、Tの母も普段はそこまで辛棒強くないと話していた)私は、古くから六畳の一員であるTにも、Oを迎えた私と似た思い——Oに六畳(或いは単にこのすごろく)の楽しさを味わつて帰つてほしいという客をもてなす気持ち——が働いて、あんなにも辛棒強かつたのだろうかと思つていた。すると、Tもまた勝負がついてホッとしていたことだらう。

家が少し離れているOを送つて坂道を下るときOが話しかけてきた。「T君、運が悪かつたね。」「ほんとね。おばちゃん泣くかと思った。」「きっと泣きたいけど

我慢してたんだね。今日のすぐろくおもしろかったね。

またやろうね」と不運だったTの気持ちを察すること  
ばを残して帰つて行つた。

私は勝負がついてホッとしたのが私だけではないこと  
をまたもや知つた。OもまたTのつきの無さに同情して  
いたのだった。

このように、みんなですごろくという一つの遊びをす  
る過程で、互いの運、不運の一喜一憂する場面に居合わ  
せる。それがたとえなじみの薄いTのそれであつてもO  
はその気持ちを察することができた。

それは、OがTやしに「すごろく」のメンバーに誘わ  
れたことで、六畳で遊ぶ一員として認められた安心感を  
持つことができたことで、可能になつたのだと思う。

結果として、彼らはけんかすることなくすごろくを  
することができ、Oは「また やろうね」と帰つて  
いった。

NとCは自分たちの気に入つたこまゝまとしたものを作  
つぎのぎに置いていく。そのごちやごちやとした品揃え  
にHが「ここ なにや?」と聞いた。二人は「なんでも  
や」と答えた。これは六畳で初めてのおみせであり、出  
前や通信販売にも似たその売り方も初めてのものだつ  
た。

けれども、私は、二人がこのおみせで楽しもうとして  
いること——注文を受けた品を用意して届けること——

◇ ある日のおみせやさん

(1) 自分の楽しみを追求できる満足

思つた。

くじびきや Lはティッシュの空箱に1から6までの数字を書いた紙を入れた。はり紙には引いた数が、「1と4は将棋、2と5はオセロ、3と6は百円あげる」と表にして書かれていた。

おもしろいゲームセンター Hはこう看板に書いた。テーブルの上にはいくつものすごろくが並んでいる。お客様の選んだすごろくを一緒にしてくれるという。

かつて、NとCの「くじや」は、引いた割りばしの先の色と同じ色のぬいぐるみを一つあげるというものだつた。そこで二人はぬいぐるみをあげることを楽しもうとしたのだった。

けれども、しが「くじびきや」で楽しもうとしたことは、これまでのおみせ「ア以手す瑠ヨ」のそれ——自分のやりたい遊びの相手を求め、一人でその遊びをしよう——と同じようなものだった。

Hも同様である。おもちゃやを遊びの場にしようとたように、この日はゲームセンターでごろくをして遊ぼうとしているのである。

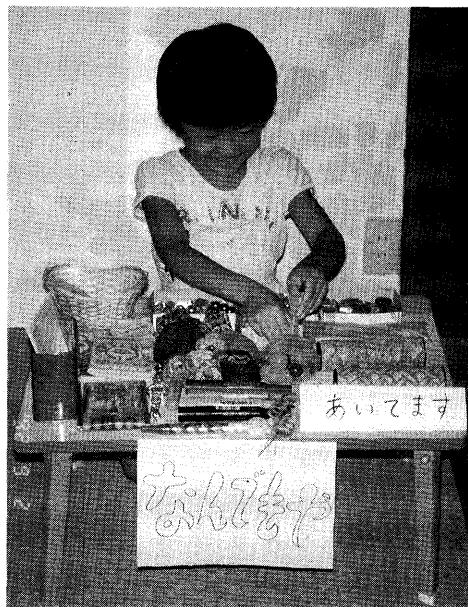
このように、彼らはこの遊びの中で自分の好きなおみせを出し、そこで自分の楽しみを追求しようとしている。その楽しみはひとりひとり別々のものである。

では、彼らはどうしてひとりぼっちでいる不安——このためOとLはけんかになつた——に陥ることなく、安心して心ゆくまで自分の楽しみを追求してきたのであろうか。つぎにそれらについて探つてみようと思う。

## (2) みんなで一つのことをしている気分

あいてますのお知らせ——見ることで—— Nはいため紙で作った三角柱を横にして持つて来た。各面に「あいてます」「おやすみです」と書いてほしいと。でき上がったそれをテーブルの上に置いた。(写真)すると、それを見たしが画用紙を持ってきてサイコロ型のそれを作り始めた。

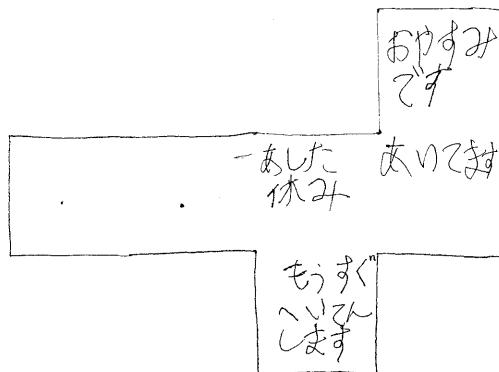
ゲームセンターのくすりやさん——聞くことで—— N  
 とCのおみせが「なんでもや」と聞いたHは、「ぼくのゲームセンターにはくすりやさんもあるのね。」と言つて「おいしゃさん」と「こ」のカンを持って来た。そして、「ほんじつ休てんプールにいっております」と書いたはり紙の下の方に「くすりやはやっております」とつけ足した。Hは早速やつて来たしに声の検査と視力検査をした。(図8)



▲ Nの「なんでもや」

「なんでもや」——なんでも売っているおみせ——といふ響きはなんとも魅力的である。それを聞いてHは、やりたい二つのおみせ——ゲームセンターとくすりや——を一つのおみせの中に設けることを思いついた。

このように、テーブルの中で各々が別々の楽しみを追求することで始まつたおみせづくりも、同時にテーブル



▲図7 Lのくじひきのお知らせ

次第にみんなで一つのことをしている気分になつてい  
く。

彼らは、この気分の中で遊ぶことで（ひとりぼっちで  
いる不安に陥ることなく）互いにこの遊びのメンバーと  
して認められている安心感を持つて遊ぶことができたの  
だと思う。

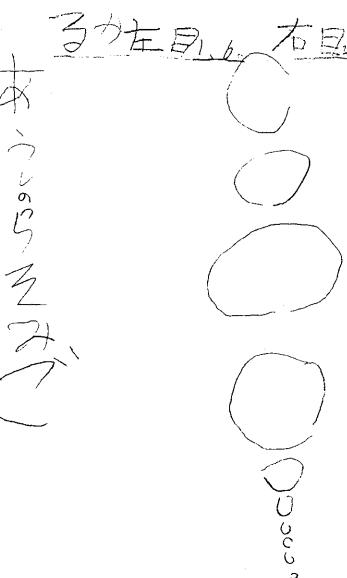


図8 Hのくすりやの視力検査表

検査が終わると上の部分を切り取って  
結果を書き込んで渡した。

私は、この遊びが、自分の楽しみを追求できると共  
に、みんなで一つのことをしている気分になれる遊びで  
あつたことで、けんかの少ない遊びになつたのだろうと  
思つていた。

\*

(舞々同人)

——終——

越しへ他のメンバーと刺激され合つてゐることがわか  
る。それは、Lのように見ることで目から刺激されるこ  
ともあるし、Hのようにおしゃべりをすることで耳から  
刺激されることもある。

それから自分らしく工夫をして各々のおみせに採り入  
れていくことで、遊びは広がつていく。そして、六畳は

\*「遊びのスクランブル交差点」は今回で終了します。

仲先生、一年間楽しい報告をありがとうございました。

(編集部)

# 幼児の教育 第九十一巻(平成四年)総目録

△一号

写真・子供讃歌

〈巻頭言〉保育の研究について

受容することをめぐつて 岡田 正章

保育への視座(1)

附属幼稚園の教育(10)

三学期の保育

津守 真 河邊 真果

村石 京 友定 啓子

二歳児との出会い

一歳児の笑い

雪兎 輪かんじきとスキー

幼児虐待を考える(5)

る虐待児の入所事例

園庭より(6)

チエコ便り(11)

演から(3)

大槻 優子

△二号

ある日の育児日記から(13)

佐藤 和代

若いお母さんたちへ 息子はやっぱり

エイリアン

山本みゆき

△三号

いつの時代にも コルチャックの著作

を読んで

津守 真

ソ連社会体制の変化と幼児教育の問題

附属幼稚園の教育(11)

主体的に行動で

伊集院俊隆

遊びのスクランブル交差点(1)

おみせやさんごっこ

生きるとは

村石 京

二歳児との出会い

友定 啓子

守永 英子

旅して想うこと

E · K

チエコ便り(12)

母と子でつくる民芸品

ある日の育児日記から(14)

佐藤 和代

若いお母さんたちへ ファミコン考

渡部みさ子

大槻 優子

△四号

ある日の育児日記から(13)

佐藤 和代

若いお母さんたちへ 息子はやっぱり

エイリアン

山本みゆき

写真・子供讃歌

〈巻頭言〉人間の尊嚴を学ぶ

津守 真 加用 文男

素朴さとパワーと

特集「生まれる」

ことばと生命と人生と

原口 庄輔

生物が生まれる

石居 進

「生まれる」という言葉から思うこと

生まれる

菅野俊一郎

低気圧の誕生

松田 佳久

アイデアを生み出す秘密の特訓

黒須 和清

「産」という営みの共有

中山まさき子

附属幼稚園の教育(12)最終回

卒業・進級

の時期に当たつて思うこと

村石 京

ある日の育児日記から(15) 佐藤 和代

幼児の笑いとその保育における意味(2)  
二歳児の笑い

友定 啓子

若いお母さんたちへ 祐子四歳、肉親  
との初めての別れ

小蘭江幸子

モーレンカンプふゆこ  
まさる、まさる、まじわる、幼稚園の  
ある日の育児日記から(16)

四月

佐藤 和代

若いお母さんたちへ

大地と共に(上) 川上 美子  
大地と共に(下) 川上 美子

写真・子供讃歌

ある日の育児日記から(17) 佐藤 和代  
講演・子どもの権利をめぐるボーラン

自我のめばえ——再び 荘司 雅子

講演・子どもの権利をめぐるボーラン  
ドの状況 J・シコルスカ

倉橋惣三の保育者理解(下) 児玉 衣子

園庭より(18) 雨の日 松井 とし

婦人宣教師、ミセス・ブライ恩の「お

ばあちゃんの手紙」(2) 小林 恵子

遊びのスクリンブル交差点(3) 開店し

たおみせやさんごっこ 仲 明子

ある日の育児日記から(18) 佐藤 和代

若いお母さんたちへ 佐藤 和代

母乳への思い 河合 聰子

遊びのスクリンブル交差点(2) 「おやす

みです」の多いおみせやさんごっこ 仲 明子

三歳児の笑い 写真・子供讃歌

ある日の育児日記から(17) 佐藤 和代

故国を後にして(6) 名を告げ合わわす

Sちゃんが動き出すまで

守永 英子

遊びのスクリンブル交差点(3) 「おやす  
みです」の多いおみせやさんごっこ 仲 明子

三歳児の笑い

友定 啓子

写真・子供讃歌

遊びのスクリンブル交差点(3) 保育にバランス感覚を



の基底線・基底面の描き方 浜田美智

シンボジウム「保育臨床の視点から園  
生活を考える」を終えて 大場 幸夫

婦人宣教師、ミセス・ブライ恩の「お  
ばあちゃんの手紙」(4) 小林 恵子

庭の番人・あさぎ

彩り・別れ

ある日の育児日記から(2) 佐藤 和代

遊びのスクランブル交差点(5) 文字の  
ある遊びおみせやさんごっこ 仲明子

土橋 光子

佐藤 和代

仲明子

△十一号

写真・子供讀歌

（巻頭言）子どもの人権をめぐって

朝 黒田 成子

津守 真

保育学を求めて～若手研究者のアイデ  
ンティティークライシス～について

田代 和美

保育環境としての施設・設備に関する  
一考察(1)

永井理恵子

河邊 果

遊ぶ子どもと人間関係 保育への視座(6)

内藤 知美

A子のこと

A・Y

幼児の笑いとその保育における意味(6)

○歳児の笑い 友定 啓子

ある日の育児日記から(2) 佐藤 和代

鳴門旅行記（下） 上田 雪江

△十二号

（巻頭言）温故知新

再会

こん袋

子どもが自分で乗り越えるとき

『ドリトル先生航海記』考 田中三保子

保育環境としての施設・設備に関する  
一考察(2)

婦人宣教師、ミセス・ブライ恩の「お  
ばあちゃんの手紙」(5) 小林 恵子

ある日の育児日記から(2) 佐藤 和代

遊びのスクランブル交差点(6) けんか

の少ない遊び おみせやさんごっこ

●本誌御購読の御注文は発売所フレ  
ベル館にお願いいたします

●万一一、落丁・乱丁などございまし  
たら、おとりかえいたします。

第九十一巻総目録

平成四年十二月一日 発行

編集兼発行人 本田和子

発行所 日本幼稚園協会

お茶の水女子大学附属幼稚園内  
東京都文京区大塚二一一

図書印刷株式会社

発売所 東京都港区三田五ー一二ー

株式会社 フレーベル館

東京都千代田区神田小川町三ー

振替口座 東京九ー一九六四〇

電話〇三三三二九二一七七八一

幼児の教育 第九十一巻 第十二号  
(一九九二年十二月号)  
定価四五〇円 (本体四三七円)

第一巻

## 0~1歳児の遊びが育つ

編集／小川清美

人間の一生の中で最も急速にドラマチックに発達を展開する0~1歳代の子どもの姿をとらえるもの。

第二巻

## 2歳児の遊びが育つ

編集／野本茂夫

自由に歩けるようになった2歳代の子どもがいろいろな環境とかかわりながら成長していく姿をとらえたもの。

第三巻

## 3歳児の遊びが育つ

編集／平山許江

集団生活に入りにくい3歳代の子どもの遊びから、友だちづくりと生活習慣の自立と遊びへの姿をとらえたもの。

第四巻

## 4~5歳児の遊びが育つ

—遊びの魅力—

編集／河邊貴子・戸田雅美

子どもが興味をもつ遊びの魅力はどんなところにあるのか、身近な保育の中からとらえたもの。

第五巻

## 4~5歳児の遊びが育つ

—遊びと保育者—

編集／河邊貴子・戸田雅美

つづきと変化する子どもの遊びに保育者はどのように関わっていけばよいのかについて考える書。



新教育要領が望んでいる自主性を育てる保育に必要な援助の仕方と子どもを見る目を養う保育実践書。

# 年齢別保育実践シリーズ

〈全5巻〉

このシリーズは幼稚園教育要領・保育所保育指針の基本にそって編集しました。現場の保育者、保育者養成担当の研究者の方々にとって「遊び中心の保育とは何か」は重要な課題です。この課題に具体的に応えるため、年齢別保育の実践例を中心に考察を加え遊びの発達が見通せるように工夫しました。

編集責任 東京学芸大学教授 小川博久

A5判 1~4巻 264頁 5巻 288頁

定価 各2,000円(税込)

全3巻セット (第3巻~第5巻)

セット価格 6,000円(税込)

全5巻セット (第1巻~第5巻)

セット価格 10,000円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの  
**フレーベル館**

# ことばからの幼児教育

幼児のことばの発達に欠かせない豊かなことば環境のあり方と援助のポイントを分かりやすく示した参考書。



幼児のことばの発達に必要な“ことばに興味関心をもつこと”“喜んで話したり聞いたりする態度を育てること”など、ことば教育の基礎知識をまとめたもので、日常保育で、子どもとのかかわりの手がかりがつかめます。

「生活のことばの習得」「絵本のファンタジーからのことばの育ち」「ことば遊び」「文字の習得法」など、ことば教育の考え方がわかり、その具体例は表現力を育てる保育に役立ちます。

村石 昭三・著

A5判・160頁・定価1,600円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783代にお問い合わせください。

キンダーブックの  
**フレーベル館**

21-B